

水の文化

ぼくらには妖怪が必要だ





歪んだ自然との結びつき

哲学者 内山節さん

ひとしずく



かつての日本の人々は、みえてい
る世界の奥にみえない世界があると
考えていた。みえているのは現象の
世界であり、みえない世界に本質が
あるという考え方である。

たとえば「私」をみても、みえて
いるのは私の現象だけだ。背が高い
とか低いとか、どんな話し方をして
どんなことについてよく語るとか。

ところが「私」の本質は何かと問わ
ればよくわからない。誰も気づい
ていない本質があるかもしれないし、
私自身もまた自分の本質を知らない
のかもしれない。

自然の本質も同じことだ。暑い夏
が来たり嵐に襲われたりといった現
象は知っていても、自然の本質とは
何かと聞かれれば満足な答えを出せ

る人はまずいないだろう。自然の本
質もまたみえない世界だ。

妖怪や物の怪も、それがみえるか
たちで現れるなら現象の世界なので
ある。それは妖怪や物の怪の本質で
はない。

とするとすべてのものの本質はど
こにあるのだろうか。かつての人々
は、それは結び合う世界にあると考
えていた。私たちにはみえない、気
づかないだけで、すべてのものは奥
の方で結び合っている。自然も人間
も、最深部では結び合う存在をもっ
ていて、この共通の存在から現れて
きた現象が、ひとつひとつのもので
あり、私であったり、他の誰か、木
や草や動物であったりする。

だから奥にある結び合う世界が
「自然」であることを人々は願った。
自然とは「おのずから」ということ
であり、作為の入らない本来のもの





若い作家たちが自ら考案した妖怪グッズを出品する「妖怪アートフリマ モノノケ市」に人々が集う。その会場は、平安京を造営する際、陰陽道によって方位の厄災を解除する社として創建された「大將軍八神社」

という意味でもある。自然しぜんに真理の世界、それゆえに神仏の世界をみたといってもよい。

ところが人間たちの行いが、自然しぜんの結びつきをゆがめてしまうことがある。その結果古代の人たちが一番恐れたのは祟りたただった。たとえば奈良時代には御霊信仰ごりょうしんぎょうが広がったが、それは謀略などによって命を落とし、人が怨霊おんりょうとなつてこの世に祟るといふものである。菅原道真は祟り神としてあまりにも有名だが、人々は怨霊を鎮めるためにいろいろなことことをした。人間たちの誤つた行いが自然しぜんの結びつきをゆがめ、その結果怨霊が祟るといふ現象が生みだされたのである。だから人々は自然しぜんの結びつきを回復するために努力しなければならなかった。

おそらく妖怪や物の怪も、結びつきのゆがみから生まれてくるものなのだろう。ただし江戸時代になると、それをも生きる世界の「友人」にしてしまう傾向も生まれた。絵画として妖怪が描かれ、カッパは少々悪さをする村の居住者になっていく。人々は結びつきのなかのゆがみも許容するようになり、それがいまに伝えられるようになった。

内山 節（うちやま たかし）

1950年（昭和25）東京生まれ。1970年代から東京と群馬県の山村・上野村との二重生活を続ける。NPO法人森づくりフォーラム代表理事。『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』『貨幣の思想史』『「里」という思想』『新・幸福論―「近現代」の次に来るもの』『内山節著作集（全15巻）』など著書多数。

特集 ぼくらには妖怪が必要だ

水の文化53号 2016年6月



小豆

川のほとりや橋の下に現れ、音を立てて小豆を洗う。もし歌が聞こえても探さないこと。探すと川にはまって死んでしまうという。

牛鬼

牛と蜘蛛が合体したような牛鬼(うしおに)は、海岸や川の淵などの水辺で人や家畜を襲う。ぬれ女とコンビを組むこともある。



トイレの花子さん

学校のトイレで呼びかけると個室から返事が聞こえるという都市伝説の妖怪。昭和20年代にはすでに「花子さん」の話があったそう。



参考文献& Web

『身近な妖怪ハンドブック』(文一総合出版 2012)
『HUMAN vol.06「特集 日本の魑魅魍魎」』(平凡社 2014)

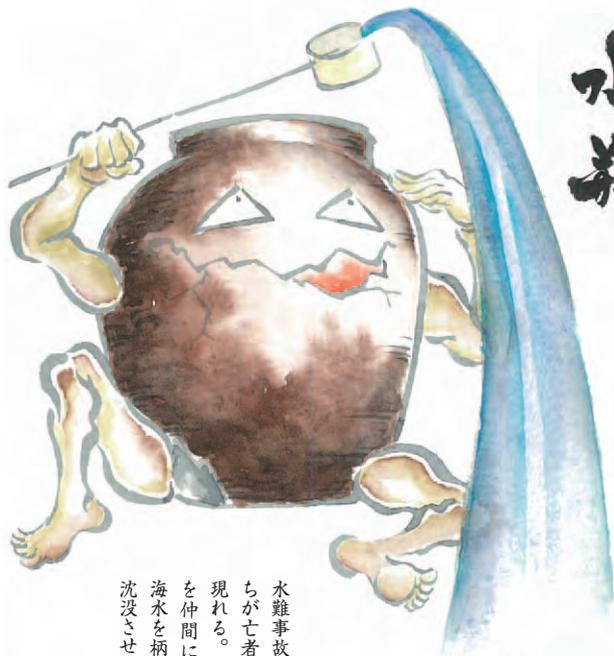
『知識ゼロからの妖怪入門』(幻冬舎 2015)
『決定版 日本の妖怪』(宝島社 2015)
国際日本文化研究センターHP「怪異・妖怪画像データベース」

正義感の強い妖怪・鬼太郎がさまざまな妖怪と対決する漫画『ゲゲゲの鬼太郎』は、アニメ、映画なども制作され長い間親しまれてきた。最近ではゲームソフトもとになった『妖怪ウォッチ』が子どもたちを中心に大人気だ。しかし、日本人にとって妖怪とはそもそもどのような存在だったのだろうか。

水辺の妖怪として代表的なのは河童だろう。今はきれいな水や水辺のシンボリックな存在となっているものの、かつては人間の尻子玉を抜くと恐れられた、どちらかというと怖い妖怪だった。河童をモチーフにした「ゆるキヤラ」が多数生み出されている現代とは何が違うのか。

民俗学者の柳田國男やなぎたくにおは、妖怪を「普通の人々の心意伝承に迫る民俗資料」としてその研究を奨励した。妖怪は人間が想像(創造)したもの。ならば妖怪を研究することは、その当時の人間や社会を研究することにつながる。河童が「怖い」から「かわいい」に変化したのは、私たち人間の側になにかしらの変化があったからだと考えられる。

かつて自然を恐れ、敬った日本人が生み出した妖怪。その変遷を、水辺も視野に入れてたどることで、自然観などの変化について考えていきたい。

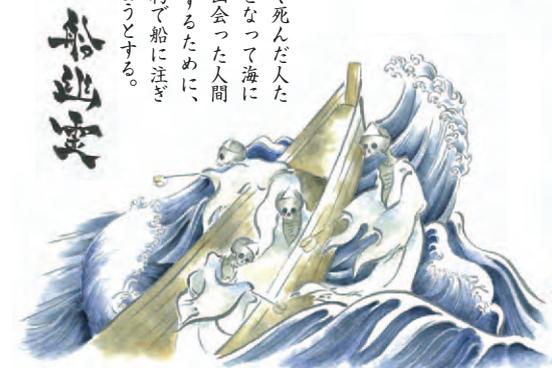


水瓶

水瓶には水を自由に扱う能力があるらしい。鳥山石燕が『百器徒然袋』で描いた「瓶長（かめおさ）」は水瓶の付喪神（つくもがみ）とされる。

川獺（かわうそ）は子どもや娘に化けるといわれる。破れた笠をかぶり、提灯を手にするなど人間のような雰囲気をもつ。

川獺



海老女

水難事故で死んだ人たちが亡者となって海に現れる。出会った人間を仲間にするために、海水を柄杓で船に注ぎ沈没させようとする。



ぬれ女

頭は濡れた髪の女性で胴体はへび。前脚は人の掌。海辺や波間にいて、人に巻きつき食べってしまう。牛鬼と連携して人を襲うとも。



汚れた風呂場に出るが、風呂桶の垢（あか）を長い舌でなめるだけで悪さはしない。「風呂掃除をきちんとせよ」との教訓か。

あか

水辺の妖怪三凶鑑

妖怪はあらゆる場所にいるが、ここでは編集部が独断で選んだ「水辺に現れる妖怪」を紹介しよう。あなたが気になる妖怪は……？

Illustration by 蘭陵亭子梅

目次

巻頭エッセイ

ひとしずく

歪んだ自然との結びつき 内山節

特集

総論

ぼくらには妖怪が必要だ

水辺の妖怪

アニメズムと絵解きが妖怪文化を生み出した 小松和彦

妖怪文化論

異界との境目「水辺」に現れる妖怪 飯倉義之

現代に息づく江戸の妖怪文化 香川雅信

Report 1

妖怪は山で暮らす「生活必需品」 徳島県三好市山城町「妖怪村」

Report 2

妖怪という「共通項」に導かれて 京都・モノノケ市

災害

大災害を呼ぶ大蛇と法螺貝の伝承 齊藤純

Report 3

遠野に息づく民話の奥深さ 岩手県遠野市

Report 4

まちを巡って「妖怪探集」 市川寛也

文化をつくる

妖怪が伝える、命をつなぐ術と記憶 編集部

水の文化書誌 44

河童の世界 古賀邦雄

連載

食の風土記 5

冬の結晶を夏にいただく日光天然の水

魅力づくりの教え 5

制約を味方にする小さなベンチャー 中庭光彦

長崎県小値賀島（五島列島）

Go! Go! 109水系 10

道の記憶と原風景を留める「越後の荒川」 坂本貴啓

センター活動報告

編集後記／ご案内

51 50 45 40 38 36 35 31 26 24 20 16 13 10 6



アニミズムと絵解きが妖怪文化を生み出した

現代の「妖怪学」の第一人者は、民俗学者・文化人類学者の小松和彦さんだ。小松さんは「日本ほど多種多様な妖怪の文化が花開いた国は珍しい」と言う。妖怪がマンガ、アニメ、ゲームに登場し、それが海外から「クールジャパン」と呼ばれ注目されているのは、日本古来の自然崇拜の信仰「アニミズム」と、仏画・絵巻などの内容や思想を説き語る「絵解き」の伝統が結びついた妖怪文化が背景にある。日本人にとって妖怪とはどのような存在なのか？

説明できない不思議さに形を与えたのが妖怪

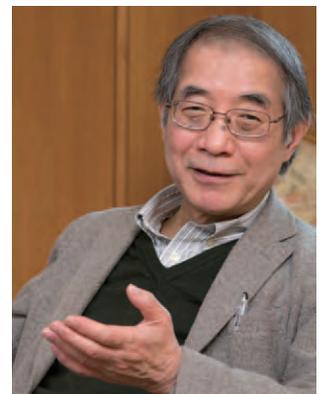
妖怪も人間がつくり出した文化の一つで、きわめて広義な概念です。

自分のもつ知識ですぐに理解できない不思議な現象や存在、現代の言葉でいえば科学的・合理的に説明できない現象や存在を広く「妖怪」と呼んできました。「怪異」（現実にはあり得ない、異様なこと）とほぼ同義語なのですが、どちらかといえば怪異は現象を指し、妖怪はそれに形を付与した存在のことです。

例えば、山へ出かけたならなんだかわからない物音がする。明らかに人間が出している音ではない。すると、当時の人々のもつ知識に照らして、あれは天狗や鬼のしわざだ、となります。現象を引き起こしている原因として不可思議な存在を想定するわ

けです。あるいは、タヌキやキツネが化けているのではないかと、その地域社会のなかで神秘的な力をもつと言いつたえられている動物を、現実から探し出して原因とします。

天狗や鬼といっても姿形は見えない。「いや、見たんだ」「真つ暗闇のなかで鼻をつままれた」など、それぞれ経験談をもち寄って、こんな姿形ではないかという共通のイメージがやがてできあがります。しかし絵は特殊な能力がないと描けません。農山漁村に妖怪の話は数多く伝わっていますが、ほとんど絵は残っていません。せいぜい絵師に頼んで絵馬として描き神社に奉納したくらいです。妖怪の絵は都の絵師たちがイメージを膨らませて描きました。例えば僧侶が布教活動のため絵師に頼んで高僧の一代記を紙芝居のような絵にして信者に説いたわけです。偉いお



小松 和彦 さん
こまつ かずひこ

国際日本文化研究センター所長

1947年東京都生まれ。東京都立大学大学院社会科学部博士課程修了。専攻は文化人類学、民俗学。信州大学助教授、大阪大学教授を経て現職。妖怪研究の第一人者。『妖怪学新考』（講談社 2015）、『知識ゼロからの妖怪入門』（幻冬舎 2015）、『百鬼夜行絵巻の謎』（集英社 2008）、『憑霊信仰論 妖怪研究への試み』（講談社 1994）など著書多数。

坊さんの生涯には、霊験あらたかにも不思議な力を使って鬼を退治した、といったエピソードもあるので、絵師はなんとかして鬼に姿形を与えなければなりません。鬼という言葉は『古事記』『日本書紀』にも登場するし『今昔物語』にも一つ目だとか鹿の頭をしていたとか、文章による記述はありますが絵はついていません。だから絵師は言い伝えを元に自らの想像力を駆使して描くしかないわけです。それが今に伝わりました。



『てんじんき』3巻（慶長〔1596-1615〕頃）巻中より。『てんじんき』は菅原道真（845-903）が神に祀られた由来を記した天神縁起を絵入り本にしたもの。写真は道真の怨念による雷神が天皇の住まい「清涼殿」に雷を落としているシーン 国立国会図書館蔵

『春日権現験記繪（かすがごんげんげんきえ）』巻4（高階隆兼〔原画〕鎌倉時代末期、天明4〔1784〕写）。藤原氏の氏神である奈良市の春日大社に祀られる神々の利益と靈験を描いた20巻からなる絵巻。写真は地獄の下級役人（鬼）が亡者たちに拷問を加えている場面。文字が読めない人にも地獄の恐ろしさがわかる 国立国会図書館蔵



目に見えない恐ろしいものに名前をつけて姿形を与えるのは、恐怖をコントロールする意味合いもあります。例えば節分の豆まき。誰かが鬼の面を被れば、その鬼に向かって「鬼は外、福は内」と豆をぶつけ、退治すればいいわけです。そうすると鬼が退散するから穢れがもち去られる。絵にしたり、お面にしたりして、見えないものを見るようにするのは、人間が恐怖をコントロールして安心したいからでもあります。

たんなる迷信から文化の一つとして

元をたどれば、妖怪という漢字は中国で使われていました。宮中で天変地異や怪異現象が起きるとそれを妖怪と表した。なんと発音していたかはわかりません。日本でも平安時代の『続日本紀』などには「怪異」に近い言葉として見られますが、次第に使われなくなりました。むしろ「ものけ」という大和言葉の方が

一般的でした。「もの」とは、それこそ森羅万象、見えないものも見えるものも表すもつとも広い概念の言葉です。何か特定の事物を指し示しているわけではありません。「け」は気配ですが、むしろネガティブな「気」として「怪」の字をあてたりします。だから「ものけ」とは「なにかしらわからないけれど怪しい気配」。

（注）井上円了

雑誌『東洋哲学』を創刊するなど仏教と東洋哲学の啓蒙に努める。後に東洋大学となる哲学館を設立。迷信打破のために1894年（明治27）『妖怪学講義』を著し「妖怪博士」と呼ばれた。

江戸時代の草双紙にも「妖怪」の文字は出てきますが「ばけもの」とルビがふつであることが多い。明治時代に仏教哲学者の井上円了（注）が、怪異現象や化け物や幽霊などはすべて科学的に説明できると主張し、そうした非合理的な迷信全般を撲滅する対象として妖怪という言葉でくくって「妖怪学」を提唱しました。ですから、当時はまだ特殊な言葉でした。

しかしその後、『日本妖怪変化史』を著した民俗史家の江馬務や妖怪を民俗学の対象とした柳田國男に代表されるように、それを信じる信じないは脇に置いて、歴史に残る逸話や農村に伝わる民話のなかから妖怪にまつわるものを拾い上げ、日本人の文化の生きた証の一つとして記録し研究されるようになったのです。

妖怪を媒介に、

日本人は文化を生み出してきた

人間に災厄をもたらす 悪い神霊が妖怪

柳田國男は妖怪を「零落した神霊」と捉えました。かつては人間に良き恩恵をもたらした神が、時代が下るにつれ人々の信仰心が失われた結果「妖怪」として立ち現れた。したがって河童は水神の、山姥は山の神の零落したものと考えたのです。

しかし『古事記』や『日本書紀』には、八岐大蛇をはじめ、数多くの災厄をもたらす神霊、つまり柳田説でいうところの「零落した神霊」に相当する存在が記述されています。

周知のように日本には古来、自然崇拜の信仰がありました。あらゆるものにはそれを活気づけている魂があるとす「アニミズム」の伝統です。生きているものだけでなく、およそ名づけられるものすべて、言葉にさえも言霊という魂が宿っている。

その魂は擬人化されています。人間の喜怒哀楽と同じように魂にも喜怒哀楽がある。魂が喜び楽しんでいれば、その恩恵を分けてもらおうと

神社を建て手厚く祀りました。逆に怒り哀しんでいると災厄を受けてしまうので、作物を奉納したり神楽を舞うなどして魂を鎮めたわけです。

妖怪とは怒り哀しむ魂が荒れ、祀られても鎮められてもいない状態と考えられます。どんな魂にも、人間に対してよい恩恵をもたらすか、悪い災厄をもたらすかの二面性があった、おそらく妖怪は悪い方の魂の側面を映し出したものなのでしょう。ですから妖怪を「零落した神霊」と考えるよりも、古代から人間に災厄をもたらす悪い神霊、「ものけ」的な存在として、日本人の文化のなかにあったと考えた方が自然ではないでしょうか。

水辺の妖怪の代表格

「河童」をめぐる伝説

水辺にまつわる妖怪となると、よく知られているのが「河童」。「河太郎」「猿猴」「かわそ」など、地方によってさまざまな呼び方があります。おそらく水辺に出没するサルやカワ

ウソなどが、タヌキやキツネと同じように化けて人をだます霊力をもったもの、と考えられていたのでしょう。川や用水で仕事をする大人や水遊びをしている子どもの水難事故は、そのような動物の幻想化した存在が引き起こすというわけです。

関東から東北地方で使われていた河童という言葉が、それらをまとめる総称として江戸時代に採用されましたが、当時の本草学者（博物学者）には、中国に伝わる水辺の妖怪「水虎」という項目に河童や猿猴などを分類している人もいます。実際、青森県津軽地方など「すいこさま」という水神を祀る民間信仰が残されている地域もあるのです。

人手不足を補うため大工の棟梁が呪力で人形に生命を吹き込み、無事に建物が完成すると元の人形に戻して川に流したのが河童になった、といった逸話も残されており、河童伝説はさまざまです。

いずれにせよ、もしやいるかもしれない「雪男」や「ツチノコ」に類する（未確認動物）のイメージで江戸時代から捉えられてきました。

ただし、河童がもたらす災厄は日常生活のアクシデントです。もっとも規模が大きく破壊的な水害は、大蛇

や龍の化身した悪霊が引き起こすとされてきました。大雨による洪水被害が頻発した岐阜県南木曾町では古くから土石流のことを「蛇抜け」と呼んでいます。大蛇が走り抜けて山津波を起こすわけです。

時代が下るにつれて河童には滑稽なイメージも付与されてきました。絵画化することで恐怖をコントロールする意思も働いたのでしょう。現代では、日本水泳連盟が河童を公認マスコットキャラクターにしたり、「河童が棲めるきれいな川に戻そう」など、自然環境をながしるに促した反省を促す水質再生のシンボリックな役割も果たしています。

想像が生み出した 現実を潤す「夢の世界」

日本ほど多種多様な妖怪の文化が花開いた国は珍しいと思います。あらゆるものに魂が宿る「アニミズム」の発想からすると、妖怪もどんな細分化して一つひとつ名づけていく。

例えば朝鮮半島では日本の妖怪に近いものを「トッケビ」といいますが、それ以上あまり分けません。不思議な現象はだいたいトッケビのせ





『百鬼夜行絵巻』[原図：光重筆]模写。室町時代後期（16世紀）の絵巻。さまざまな妖怪が夜行する様子を描いたもの。土佐光信が描いたと伝えられるもののほか、複数の伝本が存在する 国立国会図書館蔵

子どもたちを中心に大人気の『妖怪ウォッチ』は、架空の時計型アイテム「妖怪ウォッチ」を使い、妖怪と友だちになる物語。ゲーム、アニメ、マンガ、玩具などを同時進行で展開中 ©LEVEL5 Inc.



上：桃山人筆・竹原春泉画『絵本百物語』から「小豆洗い」

下：鳥山石燕『画図百鬼夜行』から「ぬらりひよん」 川崎市市民ミュージアム蔵



いにします。ところが日本ではいちいち名前をつける。「小豆洗い」「べとべとさん」「砂かけ婆」「一反木綿」「ぬらりひよん」……などなど。『今昔物語』や『宇治拾遺物語』に登場する「百鬼夜行」とは、百人の同じような鬼ではなく、違う姿形をした100種類の鬼です。中世からいから鬼も細分化が始まり、丹波国大江山の酒呑童子など、地域によって異なる鬼も伝わりました。

種類が多さも珍しいですが、それと同時にせつせと造形化したのも日本の特性です。その伝統は『妖怪ウォッチ』に至るまで連綿と続いているのです。漫画家の水木しげるは『ゲゲゲの鬼太郎』の敵役に多くの妖怪を登場させましたが、『百鬼夜行絵巻』や幕末の絵師、鳥山石燕の妖怪画などを参考にしています。さらには昔話や民間伝承に登場する名前だけの妖怪にも姿形を与えた。それが広まり、多くの人が妖怪と聞けば水木しげるの絵を思い浮かべるまで

になったわけです。「アニメズム」と仏画・絵巻などの内容や思想を説き語る「絵解き」の伝統が日本のマンガ、アニメ、ゲームに多種多様な妖怪を登場させました。日本人は妖怪を媒介にしつつ、想像力を働かせてさまざまな文化を生み出してきたし、それが現代にも残っています。今、妖怪が豊かな文化資源となって世界にも発信されていることを、海外の日本研究者は羨ましいと言います。

空を飛べる魔法はありませんが、かつての人々は物語をつくって、そのなかで空を飛んだり、海底の竜宮で遊んだりしていました。つまり現実を潤すような夢の世界だったわけです。妖怪も同じです。もしも、私たちの世界から妖怪や妖怪にかかわるものは迷信だから一切使ってはならないとされたら、とても不自由でしょう。

だから、この世知辛い現実をひととき忘れ、空想の世界に遊ぶファンタジーとして私たちは妖怪を楽しめばいい。妖怪のいない世界なんて味気ないじゃないですか。

(2016年3月3日取材)

総論 ほくらには妖怪が必要だ

異界との境目 「水辺」に現れる妖怪

妖怪は多様だが、水辺だけを見た場合、どのような妖怪がいるのだろうか。代表格は河童が挙げられるが、それ以外の存在も知りたい。そこで妖怪に関する著述が多い飯倉義之さんに、水辺に現れる妖怪についてお聞きした。水辺は生活空間と自然の境界にあることが多いため、妖怪が出やすく、怪異も起こりやすいという。



生活空間の〈きわ〉は
不思議なことが起きる

かつての村落共同体では、すべて知り尽くした安心できる生活空間を「この世」、そこから外へ出て、なんの情報もなく不安な場所を「異界」と捉えていました。さらに、「この世」と「異界」が重なる境目を「境界」と呼び、妖怪や幽霊が出たり、不思議なことが起こりやすい場所だと考えられてきました。境界である村境に、お地蔵さんや道祖神を多く祀ったのはそのためです。

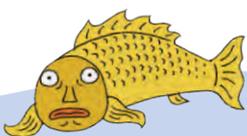
境界とは二つの空間をつなぐ場所
で、かつどちらの空間にも属するあ
いまいな場所です。すなわち「両義
性」を備えた空間。例えば橋、坂や
峠、水辺などがこれにあたります。

橋は向こう側とこちら側をつなぐ
ものです。不思議なこと、奇跡的な
出会いが橋の上では起こりやすい。
義経と弁慶の出会いも京の五条の橋
の上でした。

上と下をつなぐ坂もそうです。上
でもあり下でもある中途半端な空間
です。里から入る峠は、山にあると
も里にあるともいえるので、天狗が
出るといえることが起こり得る。

時間にも境界があります。夕方は

上：歌川広景「江戸名所道戯盡二 両国の夕立」（安政6〔1859〕）。川に落ちた雷様の尻子玉を河童が狙うけれど、雷様が放屁したので河童はたまらず鼻をつまんでいる 国立国会図書館蔵





飯倉 義之さん

いいくら よしゆき

國學院大学文学部日本文学科 准教授

1975年千葉県生まれ。國學院大学大学院修了。博士(文学)。国際日本文化研究センター一研究員を経て現職。専攻は民俗学、口承文芸学。世間話・都市伝説研究の一環として、怪異・妖怪文化を研究。編著に『ニッポンの河童の正体』(新人物往来社 2010)、共著に『妖怪文化の伝統と創造』(せりか書房 2010)『図解雑学 日本の妖怪』(ナツメ社 2009)など。

昼でもあり夜でもあるあいまいな時間帯です。「黄昏」が「誰そ彼は? (あれは誰ですか)」という大和言葉からきているように、薄暗く人影すら見えづらくなる。だから事故や怪異が起こりやすいのです。

ところが、現代の都市では村落共同体のような理論が成立しづらくなりました。知っている場所が安心できる空間だとすれば、都市はほとんどが知らない場所です。マンションには大勢の人が暮らしていますが、他人の住戸にはほとんど入ったことがない。だからどこに恐怖が潜んでいるかもわからない。今の私たちは、

実は境界だらけの世界で暮らしているのです。

水辺は人間にとつて「もつとも身近な境界」

境界のなかでも、水辺は妖怪が出やすく、怪異の起こりやすい空間です。もともと水辺は、生活空間の端にあるもの。昔から水辺の真横に住むのはジメジメとして気持ちのよいことではありません。トイレや風呂などの水場も家の端にあります。けれども水は生活に欠かせない。水辺は私たちの「いちばん身近にある境界」といえます。

水辺に伝承が多いのは、身近にありながらも時に人の命を奪いかねないから。そもそも人は水のなかで生きられない。だから水に「異界」のイメージを強く投影したのでしょう。家のなかの水辺ともいえるトイレは、特に怪異が起こりやすい場所とされてきました。古くは厠でまじないが行なわれました。「トイレの花子さん」などの怪談も有名です。よく知る空間でありながら、排泄という特別なことにしか利用しない場所。しかも学校のトイレとなると、集団生活で唯一「個」を感じる、とても

不安定な場所です。

池や沼、川は妖怪伝承が多く残りますが、海や浜辺はそれほど多くありません。海は妖怪よりも、海の主である巨大生物がいるという考えが一般的でした。古くから「鮭どころ」として知られる新潟県村上市では、サケが海の主だと信じられてきたため、今でもサケを食べない家があります。

沖繩には、海の主に無礼をはたらくと祟りや災害が起こるとされ「ヨナタマ(魚の魂)」の伝承があります。ヨナタマとは人面魚のこと。ある日、漁師がヨナタマを捕まえて持ち帰り、火で炙って食べようとしたところ、大津波が来て集落ごと押し流されてしまったそうです。この大津波は、1771年(明和8)に起きた「明和の大津波」です。

池や沼にもガマガエルやヘビなどの主がいます。カエルやヘビは両義性(水陸両生)をもち合わせているので化けやすいとされてきました。

相撲とキュウリは水神の名残?

化けはしないものの、水陸の両義性と水辺の妖怪で思いつくのが河童。名前は各地でさまざまですが、背が低く7〜8歳の子どもの姿で現れるのが特徴です。

河童は相撲が好きで、やたらと「相撲をとろう」と言ってきます。キュウリも好物です。これらは、河童がかつて水神だった名残とも考えられます。なぜなら相撲は神に捧げる神事の一つでしたし、ウリやキュウリは水神への夏の捧げものでした。



月岡芳年『和漢百物語 白藤源太』(慶応元[1865])。伝説の力士、白藤源太が河童に相撲の稽古をつけている 国立国会図書館蔵

河童の呼称の分布図

出典：国立歴史民俗博物館の展示ハネル「河童一呼称の分布図」を作成者・三好周平氏の許可を得て転載



『寛永年中豊後国肥田ニテ捕ル水虎之図』。今の大分県日田市付近で捕えられた河童を写生した絵とされる。
川崎市市民ミュージアム蔵

鳥山石燕「画函百鬼夜行」から「河童」(右)と「獺(かろうそ)」(左)。動物のカワウソは川辺に棲むことから河童のモデルの一つともいわれている
川崎市市民ミュージアム蔵

人を水に引き込んだり、尻子玉を抜く悪い河童もいますが、何かをしてあげるとお礼として薬や高価なものをくれるのも河童の特異性です。河童は、水神の零落した姿なのかもしれません。

また、河童は悪さをして捕まったあとに「詫び証文」を残していきま

恐怖の対象から親しみやすい存在へ

ほかの妖怪と大きく異なる点ですね。

河童のイメージは江戸期に成立し

ました。これは灌漑や土木技術が発達して、人間がある程度水をコントロールできるようななった時期にあたります。全国的に見ても河童伝承の多い福岡県の田主丸町(現・久留米

市)から佐賀県にかけての佐賀平野は、国内有数のクリーク(注)地帯です。

つまり、水が人間の管理下に置かれたことで、水辺が恐怖の対象では

なくなりました。しかも、河童は体も小さく、ぱったり出会ってもなんとかなるイメージ。ほかの妖怪よりも明らかに矮小化されています。生活に根づいた川に現れる河童には、人々の水への親近感が投影されているの

かもしれません。

2016年の夏、青森県の八戸市博物館で「かつぱ展」が開かれます。展示の目玉は「よるな近づくな。メドツが出るぞ」と描いてある看板です。メドツとは八戸周辺の河童の呼称。つまり、農業用水に子どもを近づけないためにかつて設置された看板が、用水路が暗渠化されて不要になったのです。今、河童が看板に使われる場合は「川をきれいにしよう」という意味合いがほとんどです。「メドツが出るぞ」という看板の撤去は、川さえも人間がコントロールできるようなった、象徴的な出来事だと思えます。

昔ほど怖い存在として語り継がれることはなくなったものの、河童をはじめとするかつての妖怪たちは、アニメや漫画をはじめとする娯楽や創作の世界に活躍の場を移し、元気に生きています。伝承が果たす役割や機能があるからこそ、多くの人がコミットしつづけるのでしょう。

長い年月を経て残ってきたのですから、人間がスペースコロニーで暮らすような日がきても、おそらく妖怪は消えないでしょう。そうなったときに、今度はどんな妖怪たちが現れるのか楽しみです。

(2016年3月30日取材)

現代に息づく 江戸の妖怪文化

時代が下り、江戸時代になると妖怪をフィクションとして楽しむ「妖怪文化」が発達する。それは畏怖の対象だった妖怪が「キャラクター化」した過程でもあった。そこで香川雅信さんに「江戸時代から現代に続く妖怪文化」についてお聞きした。妖怪の変遷には社会の移り変わり、それに基づく人々の心の変化がきわめて密接にかかわっていた。

江戸期の三大改革と妖怪文化の変遷

2015年、神戸市立須磨海浜水族園で「水辺の妖怪」の特別展が開催され、私も講演しました。水辺の妖怪といえば河童や海坊主を思い浮かべますが、実在する魚が妖怪的に扱われることもよくあったのです。例えばサメ。古くは鰐とも呼ばれました。「水面に映った影を鰐に呑まれるとその人は死ぬ」とか「海で船が進まなくなったら、それは鰐に魅入られたせいだ」といった話が各地にあります。

古来、日本人は自然への恐れや、理屈では説明できない事象への答え

として妖怪という存在を生み出してきました。江戸時代には、都市部を中心に妖怪をフィクションとして楽しむようになる。それが大衆文化としての「妖怪文化」に発展します。

興味深いのは、長く続く江戸時代で妖怪文化のあり方にいくつかの変遷があったことです。江戸の三大改革（享保、寛政、天保）が区切りになると私は考えています。

「妖怪はいない」が常識になる

まず享保の改革（1716～1745）は、長く緩やかに文化に影響を与えました。八代將軍吉宗は、殖産

香川 雅信 さん

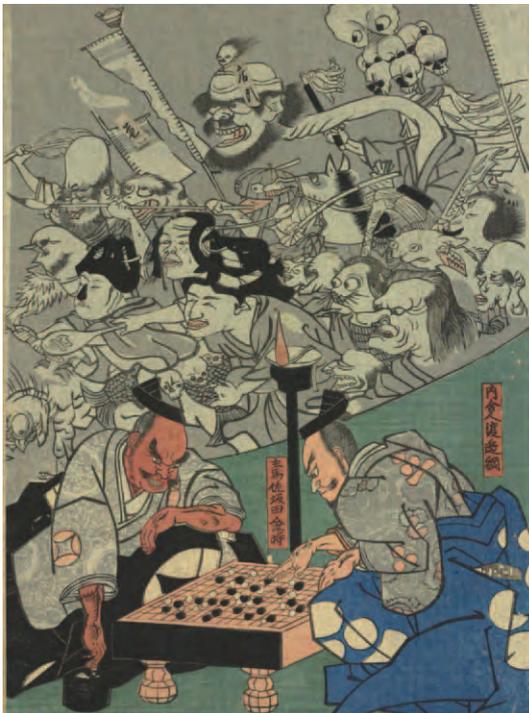
かがわ まさのぶ

兵庫県立歴史博物館 主査・学芸員

1969年香川県生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。総合研究大学院大学文化科学研究科にて妖怪に関する研究で博士号（学術）を取得。1999年4月から兵庫県立歴史博物館に勤務。「妖怪を必要としてきた人間（の文化）」を研究する。著書に『江戸の妖怪革命』（角川学芸出版 2013）、共著に『図説 妖怪画の系譜』（河出書房新社 2009）などがある。



一勇斎（歌川）國芳『源頼光公館土蜘蛛妖怪圖（みなものよりみつこうやかたつちくもようかいをなすず）』（天保14〔1843〕）。熱病に伏せる源頼光（右端）が將軍・徳川家慶、手前の四天王が水野忠邦ら幕僚たち。そして、屋敷に押しかけた無数の妖怪たちは天保の改革で犠牲になった町人たちに見立てられている 国立国会図書館蔵





三代目歌川豊国『東海道四谷怪談』。非情な夫に裏切られ、死んだあと崇りをなす「お岩」が提灯から現れるシーン。『東海道四谷怪談』は鶴屋南北作の歌舞伎狂言 国立歴史民俗博物館蔵

江戸の三大改革と「妖怪文化」の変容			
	第一期	第二期	第三期
時期	「享保の改革」以降 1716年(享保元)～	「寛政の改革」以降 1787年(天明7)～	「天保の改革」以降 1841年(天保12)～
特徴	博物学的傾向、滑稽	怪奇趣味、 生世話(リアリズム)	風刺、華美
代表作品	鳥山石燕 『画図百鬼夜行』	四世鶴屋南北 『東海道四谷怪談』	一勇斎(歌川) 國芳 『源頼光公館土蜘蛛妖怪圖』
享受層	武士、上層町民など 知識人層	庶民	庶民、子ども
変化	恐怖の対象から 娯楽の対象へ	妖怪<幽霊 矛盾を体現する幽霊が優勢	庶民=幕府を公然と皮肉る風刺画が人気 子ども=おもちゃ絵によって低年齢化

出典：香川雅信氏の論文「江戸の三大改革と妖怪文化」より編集部が一部加筆して転載

興業政策を進め、その一環として本草学(博物学)を推奨し、全国に採葉使(注)を派遣して各地の物産を徹底的に調査させました。そうした科学的アプローチは、日本人の自然観を大きく変えたのです。

典型的なエピソードがあります。植村政勝という本草学者が、下野国の那須野に殺生石の調査に行ったときのこと。九尾の狐が化身したとされる殺生石は、近づく者を皆死に至らしめるという伝説で恐れられていたのですが、政勝はその殺生石を躊躇なくかち割り、自ら舐めて味をみて「普通の石だ」と結論づけたのです。自然はそれまで、信仰や伝説といった「意味」をもった存在でした。それを政勝は「物は物であり、観察

できる要素の集合体でしかない」と見なしたのです。

こうして自然との接し方が変わってくると、人々は徐々に自然を恐れなくなり、自然の象徴だった妖怪の地位も落ち、「妖怪なんていない」という考えが常識になっていきました。ただし、このときの江戸の人たちは「いないけれどもいる」ということになって楽しんだ方がいい」と考え、妖怪を娯楽の対象として捉え直します。このおかげで18世紀後半に妖怪文化が盛んになるのです。

このころ刊行された鳥山石燕の『画図百鬼夜行』は、いわば「妖怪図鑑」のようなもの。それまで概念上の存在だった妖怪にわかりやすい視覚的特徴を与え、人々の好奇心を満たすユニークなキャラクターとして描きました。これを機に、妖怪は浮世絵や芝居、落語の題材としても使われるようになり、江戸の社会に妖怪ブームが起こったのです。

当時、特に人気があったのが、滑稽な化け物(妖怪)が多数登場する「黄表紙」という大人向けの草双紙でした。これは滑稽絵本ですが文芸性が高く、作者も武士が多かった。黄表紙を多く描いた十辺舎一九や滝

沢馬琴も実は武士です。黄表紙は知的な遊びや風刺のきいた内容なので、当時の妖怪文化の享受層は知識人たちだったことがわかります。

恐怖の対象から再び娯楽の対象へ

この妖怪ブームに水を差したのが寛政の改革(1787～1793)です。綱紀粛正で言論・出版に厳しい統制が加えられ、黄表紙は急速に衰えます。

一方、この時期は飢饉などにより貧しい人々が大量に江戸へ流入します。文化の中心は、圧倒的に人口が多い庶民に移ります。すると知的な笑いよりも、わかりやすく刺激の強い娯楽が求められるようになります。その結果、さまざまな仕掛けで観客を怖がらせる「怪談狂言」や、残酷な殺人や崇り、怪奇などおどろおどろしい表現を売りにした「合巻」という草双紙が流行します。登場する妖怪に、もはや滑稽さはなく、人間を襲う不気味で恐ろしい存在として描かれました。「妖怪文化」の質が暴力的、見世物的なものへと変容していったのです。

また、『東海道四谷怪談』のように、

(注) 採葉使

山野に分け入り、薬草を採集する人のこと。



庶民の厳しい暮らしをリアルに描く「生世話物」というジャンルが人気を博し、自然に由来する妖怪より、人間の恨みや情念を体現した幽霊の方が人々に受け入れられたのです。

三度、妖怪文化の転機となるのが、天保の改革（1841〜1843）。庶民の暮らしを厳しく規制しようとしたこの改革は2年足らずで失敗に終わるのですが、当時の人々は幕府に不満を募らせていました。そんな折に板行された『源頼光公館土蜘蛛妖怪圖』（二勇齋「歌川」國芳画、1843年「天保14」）は、妖怪の姿を借りて庶民の怒りを表現した風刺画として大評判となります。あまりの人氣に版元が恐れをなして自主回収するほど。しかし、その後も次々と似たような妖怪風刺画が出回るようになりました。

また、天保の改革では多色刷りの華美な出版物が禁止されたため、失敗後はその反動でいっそう豪華なもののがはやり、浮世絵師たちがこぞってカラフルなおもちゃ絵を制作します。なかでも妖怪を題材にした「化け物双六」や「お化けかるた」、そして「化け物づくし」という一枚ものの妖怪図鑑が子どもたちに大人氣となり、たくさんの種類がつくられま

した。

こうして滑稽で愛されるキャラクターを取り戻した妖怪は、大人から子どもまで誰もが楽しめる娯楽として、江戸末期に一つの成熟期を迎えたのです。

アカデミズムとエンタメの共犯関係

おもちゃ絵のブームが明治中ごろまで続いた後、妖怪は学問の世界で扱われるようになります。明治期には哲学者の井上円了が「妖怪学」を提唱し、大正・昭和期には、風俗史学や民俗学などが妖怪を題材に研究を行ないました。

再び多くの人たちの間で妖怪が脚光を浴びるのは高度経済成長期以降です。これは水木しげるの存在が大きいです。1968年（昭和43）、『ゲゲゲの鬼太郎』のテレビアニメが放送されると大ブームが起こりました。

水木しげるに始まる現代の妖怪文化は「妖怪再発見」と言い換えてもよいかもしれません。その特徴は、エンターテインメントとアカデミズムが密接に結びついている点です。『ゲゲゲの鬼太郎』に出てくる妖怪

の多くは、柳田國男の『妖怪談義』に紹介されたものです。水木しげるは明らかに民俗学の成果を利用し、それをエンターテインメントに昇華させているのです。その後、作家の京極夏彦さんがやはり民俗学の研究をベースに小説を書いています。アカデミズムとエンターテインメントに、ある種の共犯関係ができあがっている。そういう点で妖怪は他には見られない分野だと思います。

そうは言っても、妖怪は古いものだけではありません。共同体のなかで自然と生まれ、語り継がれるのが妖怪です。現代なら現代なりに、都市や学校という新しい共同体で「トイレの花子さん」や「口裂け女」などの新しい妖怪が生まれ、それがまた学問の研究対象にもなっています。そして今、インターネットで妖怪

話が次々と誕生しています。例えば「くねくね」などいろんな話がネットにはたくさん出回っています。

不特定多数の人がつながるインターネットの世界では、誰もが妖怪のつくり手、伝い手になり得る。これからは、今までと比べものにならないスピードで新しい妖怪たちが次々出現するかもしれませんね。

（2016年3月17日取材）



一反木綿に乗る鬼太郎と目玉おやじ。水木しげるの『ゲゲゲの鬼太郎』は近年の妖怪文化に強い影響を与えた
©水木プロ



『おばけかるた』（万延元[1860]）。天保の改革のあと、数多くつくられたおもちゃ絵の一つ
兵庫県立歴史博物館蔵（入江コレクション）

妖怪文化論 ぼくらは妖怪が必要だ

徳島県の山間部に「妖怪」でまちおこしに取り組む地域がある。吉野川の上流部に位置し、名勝「大歩危小歩危」を擁する三好市の山城町だ。児啼爺発祥の地であり、世界妖怪協会の「怪遺産」にも認定されている。高知県、愛媛県との境にあるこの山深きまちを訪ねると、妖怪は人々の暮らしを支えてきたかけがえのない存在だとわかった。

妖怪は山で暮らす 「生活必需品」

妖怪と遊んだ
おばあちゃん

「妖怪の話かね？ 妖怪はな、子どもと一緒に遊んだよ。小学校5年生か6年生かな、弟も一緒にいたんだよ。夏休みにお父さんの手伝いで、ずーっと山奥に行ったんじゃない。昼ごはん食べたあとに谷へ下りて、弟とウナギをとって遊んでたらな、

山からな、履物も履かず服も着ず、蓑を羽織っただけの男が降りてきたんや。私は子どもだから遊ぼうと思っただけで男に水をかけたんよ。しばらくして山に帰って来たから、お父さんに『あれ誰？』と聞いたんよ。そしたら『それ、ヤマジジじゃ！』というんや。いや、ふつうの人間よ。ただ長い毛がぼつぼつ生えてたな。足とかにな」





うっそうとした妖怪古道の奥にある「赤子淵」



子どものころ妖怪と遊んだという岡瀬シゲ女さん。右上は山城町の住民がつくった「ヤマジジ」の彫刻

こう話してくれたのは、岡瀬シゲ女さん（82歳）だ。ヤマジジが帰っていった山は、裸足ではとても歩けないような森だという。

徳島県三好市山城町には、こうした妖怪にまつわる話がたくさんある。妖怪と遭ったという人は岡瀬さん一人になったが、幼いころに親や祖母から妖怪の話聞いた人は数多い。今わかつていてるだけでおよそ60種、町内150カ所に妖怪や憑き物の伝説が残っている。

山城町（注1）は人口1万4000人ほどだったが、合併して三好市となった2006年（平成18）には5000人弱と3分の1に減少。このまま過疎が進めば消滅してしまう、人を惹きつける魅力がないものかと見回すと、鎌倉時代から続く山岳武士（注2）や妖怪の話があった。そこで妖怪を核に伝説を掘り起こして活性化につなげようと、町の有志が「四国の秘境 山城・大歩危妖怪村」（以下、妖怪村）を結成した。

妖怪村のプランは2008年（平成20）、農林水産省の「いきいきふるさと大計画」に採択される。民主党政権の事業仕分けに遭うまでの2年間、妖怪の彫刻づくりや妖怪巡りのコース整備などを行なう。その後も

住民のボランティアに支えられ、毎年11月に「妖怪まつり」を実施するなど、活動を続けている。

死と背中合わせの山の暮らし

妖怪村の村議会議員を務める下岡昭一さん、事務局の平田政廣さんに町内を案内していただいた。18歳でこの土地を離れ、退職後に戻った下岡さんは妖怪話の聞き取りを行ない『こなきじじいの里 妖怪村伝説』（2009）と『妖怪村伝説 おとろしや』（2012）をまとめた人物だ。平田さんは山城町役場の職員として地域振興に長年取り組んでいた。

吉野川の支流・藤川谷川ふじかわだにの流域から巡ると、目に飛び込んできたのが、そこかしこに置かれた妖怪の彫刻。「すべて住民の手づくりなんですよ」



山城町の妖怪話をまとめた下岡昭一さん（右）と妖怪村の事務局を務める平田政廣さん（左）

（注2）山岳武士

大黒氏、藤川氏、西宇氏の「三名士」が有名。鎌倉時代に土佐、伊予との国境警備のため来住したと伝わる。

（注1）山城町

1956年（昭和31）、三名村（さんみょうそん）と山城谷村（やましろだにそん）が合併してできた。

写真：高台から山城町を望む。この険しい地形で暮らすための知恵の結晶が妖怪なのだ



昭和30年代の大歩危峽 提供：妖怪村

と平田さん。表情は怖い、どこか愛嬌がある。

藤川谷川の支流を遡ると「妖怪古道」に出た。もともとお遍路の道だったという苔むした小道は昼なお暗い。岩陰から先が見通せないの何か出そうだと思ったら赤子の彫刻が現れてドキッとす。ここは「赤子淵」。そばを通りかかると「オギヤーオギヤー」と赤子が泣く声が聞こえるとの言い伝えがある。足元が滑りやすいので覗き込むと淵に落ちて命を落とす危険性も……。実際に下岡さんの親戚は自転車です淵に落ちて大ケガをした。

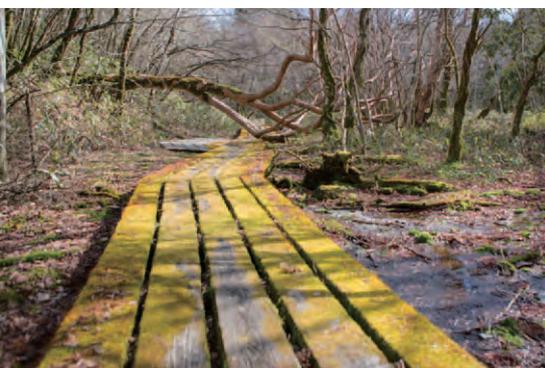


住民手づくりの大天狗の彫刻。この付近には天狗にさらわれた言い伝えが残る

山道で飢えや疲労、脱水で亡くなった人の霊といわれる「ヒダルガミ」の彫刻がある。住民たちは「山にいるときは水は一口、おにぎりの3分の1は必ず残しておけ」と言われて育つ。ヒダルガミに取りつかれて死なないようにだ。「山仕事の帰りに道に迷うとどうしようもないですからね」と下岡さん。つづら折りの山道を登りきった見晴らしのよい場所に大天狗の像が立っていた。平田さんが「あれが私の自宅です」と指さす先を見ると、垂直に近い切り立った山肌の家がある。まるで天空に浮かんでいるようだ。

いかに険しい地形であるかがわかる。「山の暮らしは厳しいです。自分の家の庭から落ちて、死ぬようなケガをする。私も2回落ちています」と下岡さん。「崖のような険しい山を崩し、出てきた岩で石垣を積んで敷地をつくり家を建て、わずかな土地で農作物を育てる。畑なんてふつうの人なら転げ落ちてしまうような急斜面です。山仕事も畑仕事も、毎日が危険と隣り合わせなのです」。

山城町では、誰かが死んだり、水害が起きたところには必ず妖怪話がある。「子どもが近づいたら危ないから、あそこに妖怪話をつくって行かせないようにしよう」と大人たちが考え、語り継がれてきた。そう、危険な場所だらけのこの土地で暮らすためには妖怪が必要だったのだ。「この妖怪たちは生活必需品なのです



水がにじみ出る野鹿池。この奥に雨乞いの祠がある

よ」。下岡さんはそう語った。

森は「水の源」だから妖怪が多い

山深い山城町だが、意外なことに妖怪話は水にまつわるものが半数以上を占める。「山や森は水の源ですよね。だから水にまつわる妖怪話が必要あります」と下岡さん。

本来なら人が住めないような険しい山中であるがゆえに、雨が降ると山津波などの災害も多い。そのため「水源を荒らしてはいけない」「山の神、森の神が宿る巨木を伐つてはいけない」との意識が今も強い。

「水源がないと生きていけませんし、むやみに木を伐ると山が荒れて洪水になる。だから昔の人は妖怪話を使って、人の手を制限していたのでしよう」と下岡さんは考えている。

代表的なのが、山城町と高知県大豊町の境にある「野鹿池」(注3)だ。二礼二拍手一礼して鳥居をくぐり、斜面を登る。さらに木道を歩くと雨乞いのため奉納された祠がある。周辺の地表にはうっすらと水がにじみ、湿地のようだ。野鹿池はこの地域の水源として昔から知られており、近隣のみならず讃岐(香川県)からも雨

(注3) 野鹿池

野鹿池山(標高1294m)の山頂付近にある。ホンシャクナゲとオオミズゴケが見られ、徳島県の自然環境保全地域に指定されている。面積は約10ha。



乞いに来ていた。

「『ここに来れば讃岐にも雨を降らせてくれる』と考えたのですね。しかも香川の人たちは雨が降ったときの姿、つまり蓑笠を着てくる。水を瓶に汲んで帰るときも『水瓶を置いたところに雨が降る』といわれていたので地面に置かず、交代で大事に抱えて帰ったそうです」（下岡さん）

ところどころに大きな切り株があるのは、過去に大木が切り出された痕跡。下岡さんは「私が幼いころ、この木を伐るなんて考えられなかった」と嘆く。平田さんは「お金に目がくらんだ人がいたのですよ」と言う。水源の森の木を伐った人は、不思議と事故や病気で急死する「祟り」の話がいくつもあるそうだ。こうした祟りや民話を「時代後れ」と片づけるのは簡単だ。しかし



「見啼爺」の石像。台座の文字は水木しげるの直筆

下岡さんが「妖怪は迷信深い山里の人たちだけの話ではないのです」と口調を強めたように、エコロジーという今日的な概念が生まれるはるか以前から自然を敬い、謙虚に暮らすために生まれた知恵なのだ。

狸に化かされた話の意外な理由

妖怪、伝説、祟り……さまざまな伝説ひしめく妖怪村の活動は、行政の補助金に頼らず、独自の財源で運営している。原資の一つが「見啼



妖怪村の活動に携わる大平克之さん（左）と中島義憲さん（右）。台湾の企業・団体と妖怪を通じた交流・連携もスタートした

爺」の商標。水木しげるの漫画『ゲゲの鬼太郎』で有名になった妖怪の商標をなぜか山城町がもっていた。合併後に譲り受け、今は株式会社大歩危妖怪村が管理する。同社の社長は「過疎が進んでいるので、地元の人に立ちたい」とかかわるようになってきた中島義憲さん。グッズ販売で利益を確保し、妖怪の彫刻づくりや視察費用にあてている。課題はあるが解決策はユニークだ。



毎年11月に町内で開かれる「妖怪まつり」。住民みんなで楽しんでいる 提供：妖怪村

妖怪村のメンバーで、ホテルや観光遊覧船事業を手がける大歩危峡まんなかの大平克之さんはこう話す。「ここには日本の原風景があります。妖怪が息づいている雰囲気は今も漂う。だから私たちは行政に『妖怪を殺さないためにも、これ以上開発しないでくれ』と要望しています」開発を望まないのは「塩さえ手に入ればあとはなんでもつくれるさ」と平田さんが言うように、ここでは皆、よそに頼らず自給自足で暮らしてきた自信があるからだ。妖怪の彫刻だつてどこかの会社に発注したわけではない。お年寄りから子どもまで、町民総出でこしらえた。さらに、狸に化かされた話がかしこにあるのも、強い共同体を保つ知恵の一つ。「急に眠くなって、気づいたら朝だった」と言えば「それは狸の仕業だ。災難だったね」と丸く収まる。朝帰りの理由がなんであれ、一人でも欠けたら労働力が失われ、途端に生活は苦しくなる。妖怪を介することで、相手を咎めない「許す文化」もかつてはあった。険しい山で暮らしつづけるために必要な記憶や知恵。それを途絶えさせないために生んだ妖怪話は、これからも語り継がれていく。

（2016年4月14〜15日取材）

Report 1 ぼくらには妖怪が必要だ

妖怪という「共通項」に導かれて



京都と妖怪。一見ミスマッチのようだが、平安時代から続く古都には、実は妖怪の気配が色濃い。洛北にある一条通りでは妖怪にまつわるイベントが定期的に行なわれており、妖怪を創作する作家と妖怪好きが集まる「妖怪アートフリマ モノノケ市」はその一つ。訪ねると、妖怪を巡る現代の若者事情が垣間見えた。



「妖怪アートフリマ モノノケ市」に出展していた若者たち。
それぞれ趣向を凝らした仮装が見事



1 泣き出す子どもが続出する「妖怪電車」
提供：百妖箱
2 百妖箱の代表を務める河野隼也さん
3 大將軍商店街の理事長、井上明さん
4 井上さんが考案した「妖怪ラーメン」

妖怪をテーマにした フリーマーケット

京都市の北、西大路通から中立売通までの約400mに商店が軒を連ねる大將軍商店街は、別名「一条妖怪ストリート」と呼ばれる。

この一条通りには平安京の時代、古くなって捨てられた道具類が妖怪（付喪神「つくもがみ」）に化けて行進したという「百鬼夜行」の伝説がある。

平安時代の人々は一条通りから南を人の住む空間、北は人以外のものが住む空間として区別した。一条通りはちょうど境界線にあたり、両者が出会ってしまふ逢魔の場所だった。

商店街の中ほどに陰陽道の神・大將軍を祀る「大將軍八神社」がある。この境内で2008年（平成20）から定期的に開催されているのが「妖怪アートフリーマモノノケ市」（以下、モノノケ市）だ。日用雑貨からお面、アクセサリー、扇子など作家手づくりのオリジナル妖怪グッズが並ぶ。

この日初めてモノノケ市を訪れた。会場は、仮装した出展者と妖怪グッズを買い求める来場者であふれ、あらゆる独特の雰囲気を出している。普段は閑散とした商店街や八神社の境内も、この日はごった返す。京都のみならず、近隣からも妖怪好きが集う人気のイベントなのだ。

商店街の活動を支える
「百妖箱」

商店街の活動を支える 「百妖箱」

モノノケ市を主催するのは、妖怪芸術団体「百妖箱」。代表を務めるのは妖怪文化研究家の河野隼也さんだ。河野さんたちは妖怪をテーマにさまざまなイベントを企画し、大將軍商店街振興組合と連携しながら商

店街の活動を支えてきた。

もともと妖怪が大好きで、アートにも興味を抱いていた河野さんは、京都嵯峨芸術大学の観光デザイン学科でデザインと妖怪文化について学ぶ。同大学院に進んで1年目の2005年（平成17）、取材で訪れたのが大將軍商店街だった。

「妖怪でまちおこしをすると聞いて話を聞きに来たところ、観光分野に詳しい人もいなければものづくりに長けた人もいない。人材不足の状態です。スタートしようとしていたので、力になれないかと思っただけです」

当初は商店街スタッフとしてまちおこしに参加。最初に中心となっただかかわったイベントが妖怪仮装行列の「一条百鬼夜行」だ。妖怪イベントは、今はメジャーだが当時は珍しかった。仮装行列が話題になりメディアに取り上げられたことで、嵐電

（嵐山電鉄）から「妖怪電車」なるものの運行依頼が舞い込む。

「これらを機にいろいろなところに出張して京都の妖怪をPRできる団体をつくれたら」と思い立ち2008年に立ち上げたのが京都嵯峨芸術大学の学生有志で構成される「百妖箱」だった。モノノケ市は、河野さんが商店街にきちんとお金が落ちるためのしくみとして発案したものだ。

現在、モノノケ市と妖怪電車を百妖箱が主催し、仮装行列は商店街から委託される形で百妖箱が請け負う。商店街は主に資金や場所を、百妖箱はアイデアや若者のエネルギーを提供する。妖怪ストリートで「お食事処いっぺん」を営む傍ら、商店街の理事長を務める井上明さんは言う。「活性化の一環としてうちでは2006年から妖怪ラーメンを販売しています。商店街も活気を取り戻そうと試行錯誤していますが、年長者が多くなかなか難しい。河野君たちにはほんとうに感謝しています」

「妖怪が好き」という 価値観を共有

今でこそ妖怪好きの間で反響のあるモノノケ市だが、最初は出展者も

（注1）一条戻橋

京都市上京区の堀川に架かる橋。平安京のもつとも北にあたる一条通りに、洛中と洛外を分ける橋として架けられた。渡辺綱が鬼の腕を切り落とした伝説の舞台としても知られる。





大江清子さんのオリジナル妖怪キャラクター「ぼっぴんたろう」をはじめとするグッズ類

少なく、地べたに「ゴザ」を敷いただけの簡素なものだった。ところが、今は出展希望者が殺到するため抽選を行なうほどだ。

ブースを一周すると、オリジナルの妖怪を作品にして販売する出展者もいれば、古典的な妖怪をモチーフにした作品も多い。河野さんによると、「妖怪には著作権がない分、好きに使用してもづくりには便利」なのだそう。過去には沖縄や北海道からの出展者もいたというから驚く。

へときめき吐血雑貨アーティスト)として活動する大江清子さんは、感情が昂ぶると吐血するという独自の妖怪「ぼっぴんたろう」をモチーフに、さまざまな雑貨を展開する。

妖怪絵師の蘭陵亭(らんりやうてい)さんは、その場で扇子に妖怪の絵を描いて販売していた。隣でお面を売る沙月さんとはモノノケ市で出会い、結婚した。

また、造形作家の起優衣(おきゆうい)さんの世界観に惹かれ3年前から売り子で参

加する八夢(はちむ)さんは、「皆共通の趣味をもって話せるのが楽しく、ここで多くの友人ができた」と話す。

来場者にも話を聞いた。お面やイヤリングを購入していた女子高生2人組は、「学校には妖怪好きがいないので勇気を出して大阪から来てみた」そう。「想像以上に楽しかった」と話す男女も、ツイッターでモノノケ市の情報を知り大阪から駆けつけた。

「インターネットの普及でコアな価値観や趣味をもつ人が情報を共有できるようになりました。SNSでやりとりしていた人たちが実際に会う場がモノノケ市になっていたりする」と河野さんは言う。

ストーリーやキャラクターが自由につくれる妖怪は「何かを表現したい」という若手作家にはうってつけの素材。妖怪好きの来場者とのやりとりも盛り上がる。モノノケ市は、妖怪という共通項が導く「創作活動の発表の場」であり、「価値観を共有する出会いの場」でもある。

京都観光の一つとして妖怪を定着させたい

当初は年2回の開催だったモノノケ市も出展者からの要望で徐々に回

数を増やし、今年は5回開く。2015年の夏からは渋谷の東急ハンズでの開催も始まった。インターネットでモノノケ市を知った東急ハンズ側から開催依頼が舞い込んだという。



5 「ぼっぴんたろう」を手にする大江清子さん 6 妖怪が縁で結婚した蘭陵亭さん(右)と沙月さん 7 造形作家の起優衣さん(左)と売り子役の八夢さん



河野さんが渋谷でモノノケ市をやって興味深いと感じたことがある。会場で妖怪のお面をつくるワークショップを開くと、渋谷の子どもたちは妖怪ウォッチのキャラクターを描くが、京都の子どもは本格的な妖怪を描く傾向が強いという。それだけ地域に妖怪が根づいているのだ。

今後は妖怪ツアーを企画したいと河野さんは考える。妖怪ストーリーの界限には、「一条戻橋(注1)や下御霊神社(注2)など怪異にちなんだスポットが多い。

週れば河野さんが大学1年生のとき、『陰陽師』の映画化で晴明神社(注3)に観光客が押し寄せた。そのときに、これが一過性ではなく定着すればいいと漠然と感じたという。

「出張も増えましたが、今後も地元をPRしながらホームグラウンドに人が集まる動き方ができれば。最終的には妖怪が京都観光の一ジャンルとして定着してくれたらうれしいです。昼は通常の観光、夜は妖怪スポットを巡れば、京都のおもしろさも倍増すると思いませんか?」

「ゴザ」からスタートしたモノノケ市の可能性を考えれば、そのポテンシャルは十分にありそうだ。

(2016年4月10・11日取材)

(注2) 下御霊神社

平安時代に冤罪を被り亡くなった貴人の怨霊を御霊として、その当時から祀っていた神社。御所の鎮守として御霊八所神を祀る。

(注3) 晴明神社

安倍晴明を祀る「魔除け」「厄除け」の神社。晴明は平安中期の天文学者として六代の天皇に仕え、当時の天文暦学から独特の陰陽道を確立したとされる。

Report 2 ぼくには妖怪が必要だ

大災害を呼ぶ 大蛇と法螺貝の伝承



桃山人筆・竹原春泉画「絵本百物語」より「出世ほら」 川崎市市民ミュージアム蔵

水にかかわる妖怪は、河童のように人間と同じスケールの妖怪だけではない。怪物と言ってもよいほど巨大な「蛇」や「法螺貝」に関する言い伝えも多く残っている。人間は自然に対するどんな恐れを蛇や法螺貝に投影していたのか。天変地異を起こす巨大な存在について齊藤純さんに解説していただいた。

超自然的な力をもつ 水の支配者としての蛇

土石流や崖崩れなど、水害による天変地異を大蛇や法螺貝のしわざと考える「蛇抜け」「法螺抜け」の伝説が各地に伝わっています。長い年を経た大蛇や法螺貝が暴風雨を呼び、大地を抜けて昇天した、海へ出た、などと言いつづえられているのです。地名として「蛇抜」や「蛇崩」が残されているところもあります。なぜ昔の人は天変地異の原因を蛇や法螺貝の化身に求めたのでしょうか。

まず蛇は世界中で不思議な霊力をもつと考えられてきました。手足がないのに動き回り、魚でもないのにウロコがある。猛毒種がいるので人間に敵対する力もつ。さらには、形が生殖器に似ていることから産出力が強い、脱皮をして冬眠もするから生死を繰り返す、といった連想も生みました。こうした理由によって、蛇は不思議な力をもつ生きものと古くから思われてきたようです。蛇が宗教に取り込まれると、西洋のキリスト教文化圏では、アダムとイヴをそそのかして禁断のリンゴを食べさせる悪い神様の象徴となりました。インドでは逆に仏教の守護神

「ナーガ」と呼ばれ、それが中国へ伝わり「龍王」になったわけですが。多神教の日本では「自然の力を表す神様」として蛇を捉えていました。『古事記』『日本書紀』の神話でも蛇は雨を降らしたり雲を呼んだり雷を鳴らす山の神様になっています。

水の恵みをもたらす神様であると同時に、洪水や土砂崩れなど水の脅威も引き起こす神様ですから、日本では守護者というよりは、水のよい面と悪い面をコントロールする超自然的な存在、つまり〈水の支配者〉といった方が適切かもしれません。

法螺貝の中身が抜け 龍や大蛇になって昇天

東京都大田区の厳正寺で毎年7月14日に行なわれる「水止舞」は、東京都無形民俗文化財に指定されている、雨を止めるための獅子舞です。

まず藁縄でとぐろを巻いた筒状のつくり物が登場します。白装束の人が中に入って法螺貝を吹きまくり、周囲の人々は水を浴びせかけ、寺まで行進します。境内の舞台に着くと解体され、藁縄で土俵のように舞台を取り囲み、獅子舞が始まるのです。地元の人々の説明では、藁縄のつく



『駿河記』上巻より「桑野山於魯地斃之図」（桑原藤泰 著、足立欽太郎 校、1932年〔昭和7〕出版）。左側は崖崩れによる落石で下敷きになった大蛇が、右側には避難する人々の姿が見られる 国立国会図書館蔵



り物は「とぐるを巻いた龍」とのことですが、これは「法螺貝」とも解釈できるのではないのでしょうか。法螺貝の中身が殻から抜け出し、龍になって天に昇り、暴風雨をもたらす。そんな様子を描いた江戸時代の絵図が残されているのです。



「水止舞」で水をかけられながら法螺貝を吹く若者たち
提供：厳正寺水止舞保存協力会

例えば『絵本百物語』の「出世ほら」の図。暴風雨のなか、奇妙な生きものが貝殻から抜け出て水を吹いています。頭に貝の蓋をかぶっており、どうやら貝の中身、つまり本体のようです。馬面で蛇腹、ウロコや牙、爪も見えます。図に添えられた詞書は、次のとおりです。

「深山にはほら貝有て、山に三千年、里に三千年、海に三千年を経て龍と

成る。是を出世のほらと云。昔より有ることにて、遠州今切（注1）のわたしもほらのぬけたる跡也と云」

日本列島の地下には巨大な水界がある？

こうして見ると、どうやら昔の人にとって、法螺貝と大蛇や龍は近縁の妖怪変化だったようです。

「蛇抜」という地名が表すように、水の支配者である大蛇や龍が大地から抜け出してくると土砂崩れや大水が起きます。同じように、法螺貝からも本体が抜け出して龍や大蛇となり、水害を引き起こすわけです。

つまりは、大蛇も龍も法螺貝も、一緒に大地のなかにいたわけですね。しかも「出世ほら」の詞書が述べるように、何千年もの長きにわたって、こうした伝承から想定されるのは、

「大地の下の巨大な水界」です。昔の人は、大地の下に水の満ちた世界があつて、そこに大蛇も龍も法螺貝も一緒にいると考えていたのではないのでしょうか。日本の神話時代には、日本列島は水の上に浮いているという世界観がありました。中世にも、地震を起こす龍や蛇が日本列島を支えているという観念はあつた。それ

が江戸時代には、鯀（こう）に変わりました。考えてみれば、なぜ川にいるはずの鯀が地面の下にいて暴れるのか。大地の下の海底のような世界に大蛇や龍や法螺貝や鯀がいる、と昔の人は考えていたのかもしれませんが。その名残が各地に伝承として残っているのではないかと。

言葉からの連想もあると思います。「洞穴」のような跡が残ったことから「法螺貝」がイメージされたはず。轟音はおそらく法螺貝を吹く音からきている。そうした連想を支えたのが、地下の巨大な水界からやってくる妖怪変化の観念だったのでしょう。

「小字名」を手がかりに地域の隠れた歴史を探る

「蛇抜」や「蛇崩」などの地名、「法螺抜け」などの伝承には、その地域に起きた災害の記憶が留められています。関心をもって調べること、地域のさまざまな歴史が明らかになるかもしれません。

探索の手がかりは、今はもう使われていない「小字名」（注2）です。地域の市町村史に、小字名一覧のような地図が載っていればすぐにわかりますし、役所には台帳などもある

はずです。注意すべきは、地名解釈には当たり外れがあり、後からこじつけた地名もあること。災害にかかわる小字名がついているからといって、鵜呑みにしない方がよいでしょう。研究者の説にも誤りがあります。その地域で災害が起きる可能性が高いとは必ずしも言えません。

しかし個人的には小字名から災害の歴史を学ぶのは有意義です。それをきっかけに地域の成り立ちに関心をもつのはよいことに違いありません。

（2016年4月22日取材）



齊藤 純 さん
さいとうじゅん

天理大学文学部歴史文化学科 教授

1958年京都府生まれ。1986年筑波大学大学院修士課程修了。足立区立郷土博物館学芸員、兵庫県立歴史博物館学芸員を経て1999年4月から天理大学文学部助教授。2006年から現職。2015年に学部長就任。専門分野は博物館学、日本民俗学。共著に『モノと図像から探る妖怪・怪獣の誕生』（勉誠出版 2016）、『モノと図像から探る怪異・妖怪の世界』（勉誠出版 2015）などがある。

（注2）小字

町や村のなかの一区画の名。大字（おおあざ）をさらに細分化した名。たんに字（あざ）ともいう。

（注1）今切

浜名湖が海に通じるあたりの名称。明応7年（1498）の地震・津波で砂州が切れ、海とつながった。江戸時代は渡し舟があり、この水路は法螺貝が抜けてきたといわれていた。

災害 ほくらには妖怪が必要だ

遠野に息づく

民話の奥深さ

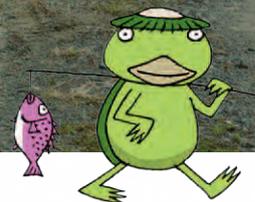
『遠野物語』の情景が残る
民話の里

霊峰・早池峰山や六角牛山、石上山などに囲まれた遠野は、妖怪譚、神隠しなど地域に伝わる物語を今でも語り部が伝承する「民話の里」だ。『遠野物語』は1910年（明治43）、遠野市土淵町出身である民話収集の先駆者・佐々木喜善（注）が語った遠野の不思議な現象を、柳田國男が聞き書きして119話にまとめたものだ。後に発刊された『遠野物語拾遺』に収録されたものも合わせる418話にも上る。

遠野にはなぜ、これほど多くの言い伝えがあったのか。

NPO法人遠野物語研究所（2014年に解散）で研究員を務めた大橋進

民俗学者の柳田國男が執筆した『遠野物語』の舞台として知られる岩手県遠野市。「河童」の好物のキュウリを釣り竿から垂らしている「カッパ淵」は有名だが、この地には河童だけでなく「座敷童子」や「オシラサマ」もいる。これらは妖怪なのか神様なのか……。渾然一体としているが、その理由は遠野の歴史的背景に深いかかわりがあった。



さんによると、「人の交流が盛んな場所ほど伝説が生まれる」という。

遠野は三陸沿岸と旧奥州街道のちようど中間にあたり、沿岸部や街道へ行くための中継地かつ交通の要所として栄えた場所だった。

「昔は宿泊する人間の恩義として自分が今まで歩いて回った地域の珍しい話を聞かせる風習がありました。だから人が多ければ多いほど噂話や物語が多く集まってきたのです」

遠野物語の舞台の中心である土淵町の山口集落などを大橋さんに案内していただいた。大橋さんの説明を聞きながら、幼いころから曾祖母や親戚に昔話を聞かされたという喜善の生家や、座敷童子が出て行ったことで衰えた山口孫左衛門の屋敷跡、カッパ淵、デンデラ野を巡る。デンデラ野は村の老人たちが家族の負担にならぬようにと身を引き、仕事をしながら共同生活を送り最期の迎えが来るのを待った場所だ。現在は畑地となっている。

また、大橋さんによると遠野にはカッパ淵が10カ所ほどある。「河童釣り」ができることで知られる常堅寺裏手のカッパ淵のほかにも、「太郎淵」や「姥子淵」など河童が出たとされる場所は多い。



遠野の人は座敷童子や河童を純粋な「妖怪」とは捉えていない。「柳田國男が遠野物語を書いたときに座敷童子を妖怪の部類に入れたことで座敷童子は妖怪になった」と大橋さんは言う。「遠野では座敷童子は神様。河童は飢饉で餓死した子どもを川に流したなどといわれていることから、供養の意味も込めて河童伝説が残ったでしょう」。

小学生も含めて 語り部を養成

そもそも遠野が「民話の里」として知られるようになったのはいつごろだろう。これについて遠野市観光協会の専務理事兼事務局長、運萬勇さん（以下、勇さん）に聞くと、遠野物語が発刊される前から遠野は民話の里だったそうだ。

たに育成する「遠野『語り部』100人プロジェクト」を2009年から実施。語り部として認定されれば認定証がもらえる。これと連動して市内の四つの小学校でも昔話を覚える取り組みを行なっている。「子どもたちは忘れたりもするが一人でも二人でも語り部になってくれれば」と勇さん。

また、2015年からは市内の名所を音声ガイドとともにミュージアム的に楽しめる「聴き旅」も始めた。

「一般に浸透したのは『遠野物語』の影響ですが、遠野では子どもが寝るときに古い言い伝えを聞かせるのは昔から普通のことでした。おそろくほかの地域にもあったと思います。が、伝承の一つひとつが今に残っているのが遠野の特徴です」

しかし、伝承を受け継ぐ語り部が減っているのも現実だ。打開策として行政は、1000人の語り部を新

課題があるとはいえ、遠野は北海道からの修学旅行先としても人気が高く、カッパ淵には年間10万人が訪れる。勇さんは「観光は仕掛けが大事。たんに昔話を聞いてくださいではもうダメ。より多くの方に来てもらえるよう力まず焦らずできることを考えたい」と話してくれた。



「たくさん民話が残っていますよ」と話す
運萬勇さん



「遠野は神隠しの話も多いんです」と言う大橋進さん

(注) 佐々木喜善

1886年（明治19）生まれ。井上円了の哲学館、次いで早稲田大学文学科に学ぶ。1933年（昭和8）に48歳で亡くなるまで『江刺郡昔話』『紫波郡昔話』などの昔話集を刊行し、『奥州のザシキワラシの話』、『オシラ神に就いての小報告』などの論考も遺す。金田一京助に「日本のグリム」と言わせしめた人物。

遠野市内の和野（わの）集落。この道はかつて山を越えて大槌町まで通じる近道だったという

厳しい暮らしが生んだ 河童の切ない伝承

遠野市の有名な語り部が、「カッパおじさん」こと運萬治男さん（以下、治男さん）だ。治男さんは市公認の「守っ人」として、15年ほど前から常堅寺裏手のカッパ淵を訪れた観光客にさまざまな民話を聞かせている。

治男さんは言う。「民話と昔話は違う。読み書きができない、貧しい、そんな民衆の暮らしのなかで子や孫になんとか今よりいい生活をさせたいと願い、教訓を口伝いに教えてきたものが民話の原点」だと。

『遠野物語』の背景には厳しく貧しい暮らしを強いられた歴史がある。それを象徴するのが河童だという。

古来、遠野地方は幾度となく凶作や飢饉に見舞われてきた。もともと厳しいときは人口の約6分の1が失われた。そこで必要に迫られたのが「口減らし」だった。栄養状態や生活環境が不十分で、あまり健康ではない子どもは河童の子とみなされ、河童の神様のもとへ「返す」風習があった。遠野の河童の指が3本なのも、そうした子どもの象徴なのだ。

『遠野物語』の五五話、「河童」の冒頭に「川には河童多く住めり。猿ヶ

石川ことに多し」とある。猿ヶ石川は遠野の大小の川が集まる本流で、その昔、猿ヶ石川には「河童」が多く上がったと治男さんは言う。

「遠野の河童は顔が赤いことで知られています。猿が起源との説もあるが、子どもの顔があるいは赤く見えたのかもしれないね。だから遠野で河童さんは神様なの。神様がいる川を汚してはだめだと、遠野の人は昔から水を大切にしてきました」

しかし今は川にゴミが流れるのが現実だ。治男さんのいるカッパ淵も、昔の状態を保っているのは前後2kmほどという。今じゃ河童さんも簡単に修行に行き来できなくなつたあと、治男さんは寂しそうに話した。

守っ人として 伝えていくべきこと

『遠野物語』はすべて実際にあった



遠野の河童の真実を語る「カッパおじさん」こと運萬治男さん。時が経つのも忘れて聞き入ってしまった



1 カッパ淵に接した常堅寺境内にある「カッパ狗犬（こまいぬ）」。頭にくぼみがある
2 「遠野かっぱロード」に置かれた河童の石像。よくよく見ると手足の指は3本だった
3 常堅寺裏手の「カッパ淵」。蓮池（はせき）川にあるこの淵は遠野でもっとも有名



話で、実在の人物、場所もあるが正直には記せないため、釈然としない書き方をしているという。

六九話に「オシラサマ」の話がある。その昔、農家の娘が飼馬に恋をし、怒った娘の父が馬を殺したところ、馬と一緒に娘も天に昇りオシラサマになった、というものだ。現在オシラサマは農業の神様、馬の神様、養蚕の神様ともいわれている。

「でもよく考えて。馬と娘では夫婦になれないでしょ」と治男さん。

かつて遠野では馬は生活の糧となる仕事のパートナーだった。遠野に多くみられた「曲り家」と呼ばれるL字型の民家には厩うまやがあり、馬はそ

こで大切に育てられていた。その一方、貧しい農家の次男や三男は裕福な家の使用人（下男）として住み込み、厩の脇の土間で残り物の食事を与えられ、なんとか食いつないだという。

オシラサマの話は、裕福な家の娘と貧しい農家出の下男という身分違いの二人が惹かれあった話なのだ。

「河童の話にしてもそうですが、今は食べものがなくて命にかかわることとはありません。しかし、食べることに必死な時代があったことも次の世代にきちんと理解してもらわなければ」

治男さんは機会があればこうして

遠野の民話を観光客に伝えている。だが、訪れる人すべてに話しているわけではない。「河童釣りに来る子どもたちには河童という言葉を大人になるまで忘れてもらいたくない」と治男さんは話す。

「いろんな修学旅行生が来るけども河童釣りが楽しかったと思ってもあれば成功。大人になって分別がついてまたカッパ淵にやって来たらちやんと今のような話をします。食べものをつくるのはお天道様と水と年寄りの知恵です。それを知らない人が増えると食べものを粗末にする、水も大事にしない、年寄りもないがしるにする。これらを大事にできな

ければ必ず原点から外れてしまう」
遠野の民話を通して先人の生き様を守り伝える。これが治男さんの「守っ人」としての役割なのだ。

口頭伝承こそが

遠野の民話の原点

遠野にはほかにも、民話を次世代へ継承する「語り部」たちがいる。

「ささやく声で淡々と」。これが遠野の語り部の特徴だと「遠野昔話語り部の会」の工藤さのみさんは言う。遠野の人にとって民話はずっと子どもを寝かしつけるための子守唄や眠り薬のようなもので、語り部もそ



4



5



6

4 1000体ものオシラサマを展示している「御蚕神（おしら）堂」（伝承園）

5 床の間に置かれたオシラサマ。現世では結ばれなかった悲哀を感じさせる（遠野ふるさと村）

6 移築された「曲り家」。左手前の入り口が厩（遠野ふるさと村）

の音調を受け継いでいるためだ。

「遠野昔話語り部の会」は15名からなる会で、「とおの物語の館」をはじめとする各施設で定期的に民話を披露している。語り部の話を聞くために何度も遠野を訪れる観光客も多く、遠野の文化や観光を語るうえでも語り部は欠かせない存在だ。

語り部の人たちは、遠野の民話の根底にある厳しい過去を知りながらに語っているのだろうか。

「河童も座敷童子も私たちは妖怪とは捉えません。河童は河童。でも河童でもオシラサマでも深くは追求しません。追求すると夢がなくなるし語れなくなるから」と工藤さん。

同じく語り部の会の新メンバーである井出八重子さんは「指導していただいた先生に『昔話りに追求は必要ない』と教わりました」と言う。

語り部にとって民話は、あくまでも聞きに来た人を楽しんでもらうもの。根底に流れる歴史もすべて飲み込んだうえで語っているのだ。

工藤さんたちは民話において「口頭伝承」をとっても大切にしている。「民話の基本が口頭伝承だから語り部も十人十色でいい。それぞれが聞いて育ったものを次の人に伝えるのが私たちの役割だと思っています。」



観光客に民話を語る工藤のみさん(上)。遠野昔話語り部の会の方々。右から井出八重子さん、後藤恭子さん、工藤さん、小松敦子さん

同じオシラサマの話でも年代や育った場所によって微妙に違います。そこも楽しみの一つ。教科書ではなく自分の耳で聞いて覚えてきたものだからこそ忘れないし、時に人の心を揺らす魂のこもった語りができると思う」と工藤さん。

民話を聞きに来る観光客のなかには、涙を流しながら聞き入る人もいるという。震災時には工藤さんたちの語りが被災者の心に寄り添い、癒した。

治男さんのような守っ人がいれば、工藤さんたちのような語り部もいる。そこに遠野の民話の奥深さを改めてみたような気がした。

(2016年4月25〜26日取材)



まちを巡って 「妖怪採集」

地域住民と一緒に妖怪がいそうな場所を探すワークショップ「妖怪採集」が各地で開催されている。その中心人物は筑波大学助教の市川寛也さん。「人々が創造的主体性を取り戻すための試み」と語る市川さんの案内で東京の南千住界隈を巡り、「妖怪採集」を疑似体験した。すると、今まで気にも留めなかったまちの風景のそこそこに、妖怪の気配を感じるようになっていた。

1 JR南千住駅南側の泪橋付近。思川（おもいがわ）の痕跡をたどりながら想像を膨らませる

消費するばかりなら いずれ妖怪は枯渇する

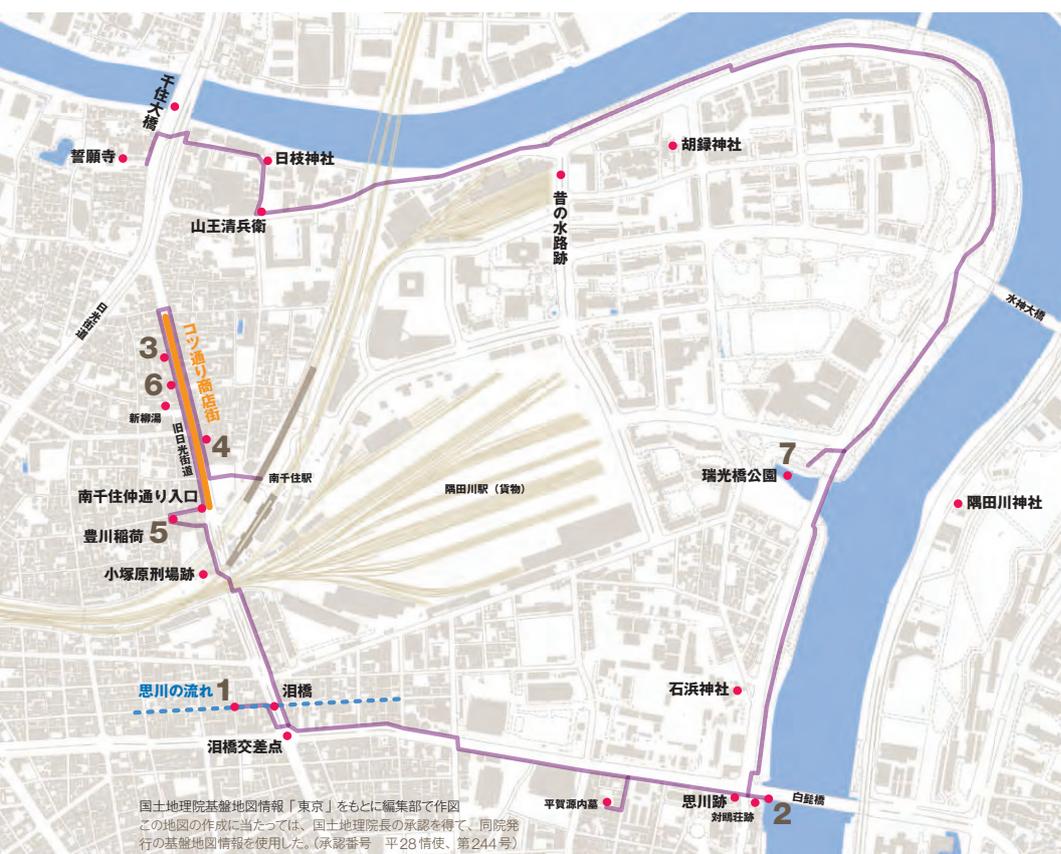
妖怪と聞けば河童や天狗といった有名な伝承を思い浮かべる。だが、それらはたまたま誰かが記録したこと、皆に知られる存在になっただけだ。本来妖怪とは、市井の人たちが身の周りの環境をよく観察し、想像力を働かせて無数につくり上げてきたものはず。だとすれば、いつの時代でもどんな場所でも、その地域に固有の妖怪を見つけ出すことができるのではないか――。

そんな発想から、さまざまな地域で「妖怪採集」のワークショップを行なっているのが、妖怪研究家の市川寛也さんだ。

妖怪をこよなく愛する市川さんには今、危惧していることがある。

「現代は、既存の妖怪をコンテンツとして消費することがほとんどです。妖怪を資源と考えたとき、今の視点で妖怪をどんどんつくっていくかなければ、このままではいずれ枯渇してしまうのではないのでしょうか」

そこで、市川さんは2012年（平成24）からNPO法人千住すみだ川とともに、南千住で「隅田川妖怪絵巻」プロジェクトを実施。小学生



2 隅田川右岸からの風景。思川はここで合流したとも考えられている



市川 寛也 さん いちかわ ひろや

妖怪研究家／筑波大学 芸術系 助教

1987年茨城県生まれ。地域社会と妖怪文化との関係についてフィールドワークを行なう。各地で地域住民と一緒に妖怪がいそうな場所を探すワークショップ「妖怪採集」を実施。論文に「妖怪文化を活用したコンテンツツーリズムの開発に向けた基礎的考察―『モチーフ』から『ジャンル』への転回を見据えて―」（2015）、「地域社会における妖怪観の形成と継承―徳島県三好市山城町の事例から」（2013）などがある。

から年配者までたくさんの参加者と150体を超える妖怪を（発見）してきた。

「妖怪採集とは、昔の人々が妖怪をつくり出したプロセスを追体験し、歴史も踏まえながら、平成のまなざしで地域の新しい物語を考える試みです」と市川さん。今回、編集部は市川さんの案内で、妖怪の面影を探して南千住のまちなかを歩いてみた。



市民が採集した 南千住の妖怪たち

市川さんとの待ち合わせは、JR南千住駅。西口を出てすぐ行きあたるコツ通りに、さっそく妖怪がいるという。夜な夜な好物の骨を掘り起こしに来る「コツ掘りヂヂイ」だ。地元の人が「コツ通りのコツは骨だよ。ここに骨が埋まっているんだ」と話すの聞いて、小学生の参加者が考え出した。

少し歩くと、南千住仲通りの入り口に小さな稲荷神社がある。豊川稲荷だ。うっかり素通りしてしまいそうな佇まいだが、じっくり観察してみると、お社の左右にあるはずの狐の像がない。その発見から生まれたのが「戻れずの狐」の物語。なんでも2頭の狐はよく連れだつて隅田川を渡り浅草界隈で遊んでいたというところが戻ろうとしたらお社の目の前に犬某という魚屋ができていて帰れなくなつてしまった(狐は犬が苦手)。以来、この付近をウロウロして、人を道に迷わせているらしい。

「コツ掘りヂヂイ」や「戻れずの狐」のように、妖怪採集では地名やその場所の特徴、あるいは地元の話から発想を得ることが多い。地



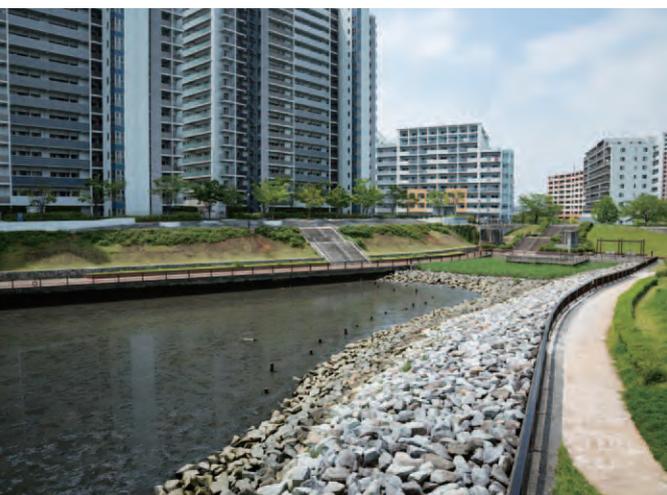
5 あるべきはずの狐の像がない豊川稲荷。「いろいろ想像できるので、おもしろいですよ」と市川さん



6 「妖怪採集中」はこうした小道一つでも意味ありげに見えてくる……



3 「コツ通り商店街」というネーミングと古びた看板がいい味を出している



7 かつて運河があった隅田川右岸の荒川区立瑞光橋公園。かすかに残る運河の痕跡と高層マンション群の対比が想像力を刺激する

4 荒物屋を営む栗本商店の建物はかつての演芸場。ここで「演芸場妖怪」を考え出した人も

地域の歴史や古い地形を知ることも、欠かせない要素だ。

「隅田川に近いこの付近は江戸の外れです。新吉原や刑場があったほかは、田畑や湿地ばかりのさびしい土地でした。そう考えると、今見ているまちの景色も違って見えてきませんか？」と市川さん。

古い絵図によると、刑場までの道の途中には、思川おもいがわという川が流れていたとある。その思川にかかっていたのが泪橋なみだばしだ。今も残る泪橋という地名には、ここを渡ったら戻れない、悲しい別れの橋という意味が込められていたのだろうか。

妖怪採集に参加した地元の男性は、子どものころ、このあたりで変な音

が聞こえたら気をつけろ、と親からよく言われたそう。その記憶から妖怪「泪橋のことだま返し」を考えた。親しい人に最後の別れが言えぬまま処刑された罪人が妖怪となり、現世の人にこだまのような妖気を発信する。その気配に気づけない人は、耳をそがれてしまうという。

妖怪文化の本質は 現と夢の合間に

泪橋交差点から明治通りを進み、隅田川まで行きあたると、広々とした川辺の風景になる。川をはさんだ両岸には、石浜神社や真崎稲荷、隅田川神社、木母寺が並んでいる。昔はさぞ多くの人々が川を船で渡り、参拝や観光をしていたに違いない。「たくさんの人やものが行き交う川のような場所は、物語が生まれやすい」と市川さんは言う。これまでの妖怪採集でも、いくつもの水にまつわる妖怪が生まれてきた。例えば船を川底に引きずり込む妖怪「ヒキズリダコ」は、水神様に体を真つ二つに割られ、今は赤い錨に姿を変えて隅田川神社に納められている。

隅田川の右岸をぐるりと歩き、千住大橋にたどり着く。隅田川で初め

て架けられた千住大橋は古くから交通の要であり、伝承も多い。「千住大橋の大亀」(注1)や「片目の大鱈鯉」(注2)は千住七不思議にも数えられているが、今は語る人も少ない。妖怪採集は、忘れ去られた伝承に、再び光を当てる役目も果たす。

「妖怪採集をやっていると、新しいものと古いもの、事実とそうでないものの境界がだんだんあいまいになってくるのです。そのダイナミズムにこそ妖怪文化の本質がある気がします」と市川さん。妖怪には嘘も真実もない。地域の人々が記憶し、語り伝えていくものは、すべて本物の妖怪になるのだ。

人々が創造的主体性を 取り戻すために

冒頭で妖怪研究者と紹介したが、市川さんの専門は芸術学。コミュニティとアートの関係性を研究テーマにしている。近年、アーティストが地域住民と一緒に何かをつくるアートプロジェクトがよくあるが、その手法に限界を感じているという。アーティストがかかわると、できあがったものは往々にしてそのアーティストの作品でしかない。地域の人た



北千住周辺の古地図を覗き込む足立学園「民俗研究同好会」のメンバーたち。「妖怪が好きです」と答える生徒も

俗研究同好会」。目的は、学園の地元である北千住の歴史や風習、文化などの調査研究。そこには当然、妖怪文化も含まれる。

市川さんは彼らと一緒に、これまで集めた妖怪の情報を整理したいと考えている。誰でもアクセスできるオープンな「千住妖怪データベース」をつくり、伝承されてきた文獻上の妖怪から新しくつくられた妖怪まで載せていけたらおもしろい。

「江戸の妖怪、昭和の妖怪、平成の妖怪が一覧できれば、そこから地域の歴史や特徴が見えてくるでしょう。フォーマットをつくって全国に展開すれば、各地の妖怪文化がますます多様化していくかもしれません」と市川さんは展望を語った。

「宮沢賢治は90年も前に『職業芸術家は一度滅びねばならぬ』(農民芸術概論綱要)と言っています。かつて各地で郷土芸能や小さな祭りが盛んだったように、アーティストの力を借りなくても地域にはクリエイティブな力が本来備わっているはずですが。地域に暮らす人々が物語のつくり手となり、創造的主体性を取り戻すための道具立てとして、妖怪文化は最適だと思うのです」

この日の午後、北千住にある中高一貫の男子校、足立学園を訪ねた。市川さんがアドバイザーを務めるサークルが、今年度から晴れて同好会に認定されたのだ。会の名称は「民

思ってしまった。道歩いていると、今まで気にも留めなかったものに何か大切な物語が隠れているような気がして、古い建物や電柱の表示、水路の跡などをきよるきよると探すようになってしまった。今度はぜひ、自分の住むまちで妖怪採集をしたい。

(2016年4月23日取材)

(注2) 片目の大鱈鯉

千住大橋付近で悠々と泳いでいた5mほどの真つ赤な鯉。江戸時代に千住大橋を工事する際、打ち込んだ杭にぶつかるため、捕えようとした職人に片目をつぶされたともいわれる。

(注1) 千住大橋の大亀

千住大橋の橋杭の間に棲み、成長しすぎて出られなくなった大きな亀。どんな洪水でも橋が流されないのは、大亀が川のなかで懸命に水をかいているからという伝承もある。

妖怪が伝える、命をつなぐ術と記憶

編集部

水辺・自然への意識と妖怪

「妖怪」をテーマに選んだのは「怖い」から「かわいい」存在となった妖怪の変遷をたどることで、人の自然観などの変化を探りたかったからだ。ところが取材を始めると「そうだったのか！」と驚くことばかり。編集部の予想をはるかに超えて、妖怪は私たちの生活や文化に深く根ざっていた。

と、妖怪は私たちの暮らしのなかで今も生きつづけている存在であり、また今だからこそ必要とされる理由があることも、徐々に明らかになっていった。

妖怪伝説の光と陰

かの宮本常一や山本周五郎が監修した『日本残酷物語』（平凡社）という書籍がある。日本の昔の民の暮らしがいかに辛く厳しかったかを綴った本だが、似た話は今も生きている。

例えば「天狗にさらわれた」という話。昔むかし、大きな杉の梢にちよんまげと着物の一部が引っかかっていた。修行僧が天狗にさらわれたのだと伝えられていたが、実はよそから来て乱暴狼藉をはたらいた不届き者を村人たちがこっそり始末したもの。「あの家の者がやったらしい」という話まで残っていると

……のは事実ではなく、その姿に驚いた親が焼き殺して埋めたそう。これに類似した「鬼子殺し」の話は全国にある。そして「神隠し」のある種の真実。村人が行きずりの異性と恋に落ちて夜逃げしても、皆が「神隠しだね」と知らないふりをすれば、残された夫もしくは妻は再婚しやすい。人手を確保し、共同体を維持する知恵だ。

現代からすれば、いずれも「とんでもない話」だが、侵入者から身を守る自衛手段であり、「生きていても苦勞するから」という苦しい親心であり、「氣を落とさずに再出発しなさいよ」という親切心でもある。

危険な場所や忘れてはならない事実を、日本では妖怪話として口承してきた。しかも、決して昔話ではない。徳島の山城町に「青石の青坊主」が棲むと伝わる場所がある。昔から水害や溺死が相次ぎ、旧国道で狭かったころは車の転落事故も多かったが、道路が拡幅した今でも車の事故はなくなり。それどころか「ガードレールに傷一つつけず」に宙を飛ばす不思議なことが起きている。「同じところで事故しよんなあ。不思議やな」（妖怪村・平田政廣さん）。妖怪は古びた伝承ではないのだ。

そもそも妖怪は、たびたび起こる不思議な現象に、人が安心してするために姿形を与えたものだった。だから、文明が発展するなかで自然への畏怖が薄らぐと、妖怪の意味合いも変わっていく。人が水辺・自然を技術的にある程度コントロールできるようなになると、例えば河童が親しみを感ぜさせる存在となったように、妖怪全般が人に楽しみを提供する大衆文化となっていく。

「鬼子」という伝承もある。生まれたときから歯が生えていて、すぐに歩き出し、ごはんも食べないで、じきに裏山へ消えていった

暗い話だが、いずれも取材で聞いたことである。さほど昔の出来事ではないこれらの話から透けて見えるのは生き抜くための「知恵」と他者への「寛容」の心。特に「知恵」を後世につなげてきたのが、妖怪を軸としたさまざまな口頭伝承だった。

今、子どもたちの間で、物事がうまくいかないと妖怪のせいにする風潮があるそう。教育的にどうなの？と心配する向きもあるが、子どもには逃げ場が必要かもしれない。それは大人も同じこと。会社では成果が常に求められ、失敗はできない。コミュニケーション

ンを円滑にする手段であるはずのSNSでも「いいね！しなければ……」など妙に気を遣う。殺伐とした空気が漂うのは、互いに対する寛容さが、私たちに足りないからではないだろうか。日常のささいな失敗をとがめだて、他人を窮地に追い込むのは得策ではない。人と人が支え合わなければこの社会は成り立たないからだ。かつて人々は、妖怪を緩衝材として他人を責めない寛容さをもっていた。

今も必要な「生きる術」

生きづらさの解消へ

妖怪を追っていくと、人々の、水辺を含む自然への意識の変化はたしかに読みとれる。そのうえで、なおも取材を進めていく

今、子どもたちの間で、物事がうまくいかないと妖怪のせいにする風潮があるそう。教育的にどうなの？と心配する向きもあるが、子どもには逃げ場が必要かもしれない。それは大人も同じこと。会社では成果が常に求められ、失敗はできない。コミュニケーション

生きづらさの解消へ

一方、創作面を考えても、著作権のない妖怪は自由だ。「モノケ市」で出会った若き作家たちは「買ってください」とは言わない物静かな人たちが、自分が創造した妖怪作品を通じて言葉を交わし、購入されることで自身の存在意義をも確認しているように思えた。現代の妖怪は、人と人をつなぐこうした可能性も秘めている。

生きづらさの解消へ

生きづらさの解消へ

生きづらさの解消へ

生きづらさの解消へ

生きづらさの解消へ

生きづらさの解消へ



河童の世界



古賀 邦雄 さん
こが くにお

古賀河川図書館長
水・河川・湖沼関係文献研究会

1967年西南学院大学卒業。水資源開発公団（現・独立行政法人水資源機構）に入社。30年間にわたり水・河川・湖沼関係文献を収集。2001年退職し現在、日本河川協会、ふくおかの川と水の会に所属。2008年5月に収集した書籍を所蔵する「古賀河川図書館」を開設。
URL: <http://mymy.jp/koga/>
平成26年公益社団法人日本河川協会の河川功労者表彰を受賞。

九州の河童

福岡県久留米市は筑後川が流れている。市のゆるキャラは「くるっば」と称する河童君で子どもたちの人気ものである。同市田主丸町のマンホールはかわいい愛嬌のある河童である。JR久大本線田主丸駅は口を尖らした河童をかたどった駅舎、プラットホームには皿に手をあてた河童像が鎮座する。筑後川の河童については、石川純一郎著『河童の世界』（時事通信社・1985）に、河童の渡来として、記されている。昔河童は唐天竺の黄河の上流に大族をなして住んでいた。そのなかの一族が黄河を下り、九州の大河球磨川に住むこととなった。この河童が繁殖して九千匹となり、九千坊と称する族長は乱暴者で、女子供をかどわかしたりするので、肥後の加藤清正は怒って、九州の猿を集めて河童を攻撃したため、河童は肥後を

去り、隣国筑後へ、久留米の殿さま有馬公の許しを得て、筑後川に住むようになり、水難除け神の水天宮のお使いになったという。八代市を流れる球磨川のほとりに、「河童渡来の碑」が建つ。九州の河童の書として、九州河童の会編『九州河童紀行』（葦書房・1993）、吉田龍四郎著『水と甲羅 遠賀川の河童たち』（自分史図書館・2005）、山崎猛夫著『徳須恵川の河童たち』（佐賀県北波多村・1991）、中村地平著『（日向）民話集 河童の遠征』（飯塚社・2004）がある。

河童の正体

大野芳著『河童よ、きみは誰なのだ』（中公新書・2000）に、河童の容貌が記されている。頭に皿があり、底の深さ約3cm。歯は亀の歯に似て尖っている。背中は亀の甲羅の色、堅い。脇腹に柔らかい縦筋がある、手足とも縮めること

ができ、手足の関節は前にも後ろにも曲げることができる。尻は亀のように約5cm尖っている。河童の性格について、斎藤次男著『河童アジア考』（彩流社・1994）で次のように挙げている。茄子や胡瓜が大好きである。猿と金気は大嫌い。馬を川へ引きずり込む。相撲が大好きである。傷薬を発明する。惚れやすい河童は狐まで恋をする。非情に尻子玉を抜く。これらの河童の性格をみてみると、非常に人間的であるといえる。全国津々浦々に残っている河童の逸話は現実化してくるようだ。河童はもともと人間であった。それらが何らかの事情で河童という妖怪にされてしまったという説が生まれてくる。水木しげる・画／村上健司・編『日本妖怪大事典』（角川文庫・2015）の「河童」の呼称に関し、水神を思わせるもの、メドチ・ミンツチ、子供の姿を思わせるもの、カップ・カワランベ・ガラツバ、

動物を思わせるもの、エンコウ・カブソ・カワツソ、特定の信仰を思わせるもの、ヒョウスベ・祇園坊主と、分類されている。相撲や胡瓜を好むのは、河童は水神としての性格を有していたことにほかならない。かつての相撲は神事であり、胡瓜などの初なりの野菜は水神信仰の欠かせない供え物であり、このことから河童が水神としての信仰の対象となっていたと考えられる。また、河童の凶暴性は水難事故の恐ろしさに起因するといえる。

河童については、国立歴史民俗博物館＋常光徹編『河童とはなにか』（岩田書院・2014）、飯倉義之編『ニッポンの河童の正体』（新人物往来社・2010）、安藤操・清野文男著『河童の系譜―われらが愛する河童たち』（五月書房・1993）、本堂清・画／文『河童物語』（批評社・2015）、石田英一郎著『河童駒引考―比較民族学的研究』（東京



大学出版会・1966）、高橋貞子著『河童を見た人びと』（岩田書院・2003）を掲げる。

水木しげるの河童

妖怪漫画家水木しげるは、2015年11月30日に逝去し、満93歳だった。彼の出身地、鳥取県境港市駅前（の妖怪ロードには河童の像も並んでいる。水木しげる著『ぼくら』版カッパの三平他）講談社・2014）、同著『貸本版河童の三平（上）（下）』（講談社・2013）をめくると、河童の不思議な世界に引きずり込まれる。三平と死神とのやりとりがのんびりとした会話で行なわれ、水泳大会では三平が神がかりで世界新記録をたて、優勝する。そこにゆくえのわからなかった父が帰ってくる。父はこの世に存在しない小人一族を発見しトランクに入れて持ち帰る。そして父は亡くなり三平は小人たちを養う。死神、小人、カッパ、狸、魔女、猫、行方不明の父、母などが登場する。最後には三平は死んでいく。エッセイスト池澤春菜氏は、この漫画の解説で、「河童の三平という漫画は何か変である。お話はけして難しくない。だが説明しようとする逃げ水の如くどこまでも曖昧になっていってしまう。」河童の存在のあいまいさ、生と死の境のあいまいさが貫かれて、不思議な漫画であるが、水木しげるの戦争体験におけ

る生と死をさまよった自画像が潜んでいるようだ。

河童の小説

前述のように福岡の田主丸町は河童の町である。芥川賞作家・火野葦平は、昭和30年ごろ、河童の魅力に惹かれたのか、田主丸町をたびたび訪れ、筑後川に舟を浮かべ、鯉とりマーシャンこと上村政雄氏の素手による鯉とりの妙技を見学している。河童作家とも言われる火野葦平は、『河童昇天』（改造社・1940）、『河童曼陀羅』（四季社・1957）、『河童ものがたり』（新潮社・1955）の小説を書いた。芥川龍之介の『河童・或阿呆の一生』（新潮文庫・1968）は、主人公が河童を追って穴に落ち、河童の世界に入っていく。泉鏡花・柳田國男・芥川龍之介著／東雅夫編『河童のお弟子』（ちくま文庫・2014）には、鏡花の「貝の穴に河童の居る事」、「瓜の涙」、「河伯令嬢」、「龍之介の「河童及河伯」、「水怪」、「河郎の歌」、國男の「河童駒引」、「川童の話」、「盆過ぎメドチ談」など、河童三人男の作品が収められている。

また、河童とは直接関係しないが、柳田國男著『妖怪談義』（講談社学術文庫・1977）、畑中章宏著『災害と妖怪―柳田國男と歩く日本の天変地異』（垂紀書房・2012）には、薩摩の阿久根の山の中、四助が山に入って雨に遭い、土手の

かげみで休んでいると、「崩ゆ崩ゆ」という声が聞こえ、四助はこの声に応じて「崩ゆなら崩えて見よ」というと、たちまち土手が崩れ、沢山の山の薯がとれた。三助はこの話を聞いて、山に入り、どこからともなく、「流る流る」という声がする。「流るるなら流れてみよ」と答えたところ、今度は松脂がどつと流れてきて三助の体に巻きつき、三助の父が松明をもつて、探しに出かけて、三助を見つけて、松明を差し向けた途端、火が移って三助は焼け死んだという。崩壊の災害と妖怪に関する同様なことが、入鹿池、木曾の与川の川上でも起こっている。

河童の児童書

子どもは最初河童と接するとき、恐怖感を抱くものの、次第に仲よしとなってくる。このような内容の児童書が多い。小暮正夫・作／こぐれけんじろう・絵『河童のクウと夏休み』（岩崎書店・2007）は、少年康一が河原でふしぎな石を見つけて、その石を割って水をかけたところ、中から河童のクウが現れてきた。康一君とクウとの友情をつづり、一見、アメリカ映画『E・I』を彷彿とさせる。シゲタサヤカ・作／絵『カッパもやっぱりキュウリでしょ?』（講談社・2014）は、ある河童が冷蔵庫

かい病気の胡瓜君（本当はパン）に遭遇し、看病して助けてやるが、今度は河童君が病気になる、胡瓜君が胡瓜を沢山もつて、河童君を見舞うという話である。武田美穂作『かっぱぬま』（あすなろ書房・2014）は、少年がかっぱ沼のほとりて昼寝をしている間に、馬が河童に引かれかけたが、河童は馬に力負けした。少年は河童を許して仲よしになる話である。他に、たかしよいち・作／斎藤博之・絵『がわっぱ』（岩崎書店・1971）、だんちあん・作／太田一希・絵『瓢箪池の河童』（銀の鈴社・2013）、橋本香折・作／橋本淳子・絵『水の扉』（ひくまの出版・1998）を掲げる。

河童の事典

最後に、河童のことについて、すべてのことを著した、和田寛編『河童伝承大事典』（2005）、同著『河童の文化誌―明治・大正・昭和編』（2010）、同著『河童の文化誌―平成編』（2012）が岩田書院から出版されている。また、西洋に関しては山北篤著『図解水の神と精霊』（新紀元社・2009）がある。以上、河童に関する書を挙げてきたが、河童は一体なものであるか。

（葉かげなるお化け胡瓜や土まみれ）

（磯部協子）



冬の結晶を夏にいただく 日光 天然の氷

水と風土が織りなす食文化の今を訪ねる「食の風土記」。今回は、厳寒期に水を溜め、天候と気温を見ながら凍らせる「天然氷」です。戦前まで重宝された天然氷も、電気冷蔵庫が普及してからは全国で廃業が相次ぎ、今では希少な存在となりました。豊かな森が育んだ水を用いた日光の「天然の氷」は、どのようにつくられ、保管されているのでしょうか。

日光の水は 大切な食文化

「ヴィーン、キリキリキリ……」という耳慣れない音が響く。1月下旬の栃木県日光市。住宅街を抜けた川べりの池では、雪が舞うなか天然氷の「切り出し」が行なわれていた。



池に張った氷の上で男性が特製の動力カッターを操り氷を切り出す。それを一つずつ竹で組んだレールに乗せ、氷室まで滑らせていく。運び込まれた氷はきれいに並べられ、杉の大鋸屑おがくずがたっぷりかけられる。

ここには「四代目徳次郎」こと山本雄一郎さんが、先代から受け継い

だ氷池こおりいけと氷室がある。水は500mほど遡った場所の湧水を導水管で引き入れる。冬は日があたらず、冷気だけで凍らせるには絶好の場所だ。

市内で観光施設を営む山本さんが氷づくりを始めたのは10年前。自身の施設で提供するかき氷用に天然氷を仕入れていたが、卸業者から「氷づ

くりをやめるらしい」と聞いた。山本さんは一面識もない先代に「手伝いますから続けてくれませんか？」と掛け合ったが首を縦に振らない。

「私がつくるので教えてください」と頼んでも断られる。あきらめきれず翌朝から氷室に毎日通い、「これは先代だけのものではない。日光の大

天然の氷を削ったかき氷は、ふわふわ感たっぷり。地元産の「とちおとめ」を使った手づくりシロップも絶品
(日光霧降高原「チロリン村」)

切な食文化です」と食い下がり、とうとう継承を許された。2007年(平成19)の冬に教えを乞い、翌年から「四代目徳次郎」と名乗って出荷しはじめた。

天候を予測して「凍らせどき」を探る

清少納言の『枕草子』にかき氷の記述があるように、氷は遅くとも平安時代にはつくられていた。日光は冬こそ寒いものの、東北や日本海側ほど雪が降らないので氷づくりに適しているが、本格化したのは明治期後半。産地としては後発だが、この地には外国人向けの民宿からスタートした「日光金谷ホテル」(創業明治6年)などがあり冷凍・冷蔵設備が必要だった。最盛期には十数軒の水室があり、地元のみならず東京などへも貨車で運ばれていた。

四代目は、例年11月初旬から氷池の清掃など準備を始め、12月〜2月で氷をつくる。厚さ15cmを目安に切り出す、通常は2回、多くても3回しか切り出せない。ただ池に水を入れただけでは、質のよい「硬い氷」にならないからだ。

普段は池を凍らせないために常に

水を引き入れて表層を波立たせておき、よい氷がつくれそうだと判断したときに水を止める。大事なのは温度と凍り方。表面の水が硬くしなければ、その下も硬くならない。

「氷は夜に育つので、そのときの温度が大切です。凍るのに時間がかかりすぎると柔らかい氷になってしまし、急激に凍っても柔らかくなってしまう」と四代目は言う。氷点下7〜8度の寒さが数日続くのが氷づくりに適しているが、予想外に気温が下がらない、あるいは逆に下がりがすぎた場合はできた氷を割り捨て、次のチャンスを狙う。だから一冬に2、3回しかつけれないし、天候の予測も重要だ。天気予報の精度は高まっているものの、四代目は「先代の子測の方がよく当たるよ」と笑う。「あの山(赤蘆山「あかなぎさん」)を見てください。稜線に雲がかかっているでしょ?雲がのんびり流れているのでよい氷はできません。いろいろなことを先代に教わりました」

氷づくりで伝える昔の知恵と工夫

天候の予測と同様に、氷を保管する水室にも先人の知恵がまつてい

る。気温が上がると氷は表面から溶け、にじみ出たその水分が温まり、さらに氷を溶かしてしまう。そこで日光杉の大鋸屑を入れるのだ。大鋸屑は表面に溶けた水分を吸ってゆっくり発散させ、壁と床の杉材が受け止めるため、1年以上保管できる。また、氷を守る大鋸屑は、逆に氷で冷やされるため腐らないという補完関係にある。水室で今使っている大鋸屑は50〜60年前のもの。「大鋸屑は水にくっついて外に出た分を補給するだけです」と四代目は語る。

切り出した氷を滑らせるレールに日光の孟宗竹もそうちくを使うのは、毎年地元から調達すれば竹林は人の手が入り、荒れることはないからだ。四代目は「滑らせるときに竹の節がブレーキ代わりにもなる。そうした昔の知恵を少しでも残していきたい」と言う。「いい氷をつくるには、氷がよくなければいけない。その氷は森が育んでいる」と考える四代目を中心に、「森と水の会」という団体も立ち上げ、森の保全に着手している。

先人の知恵と工夫がぎっしり詰まった日光の「天然の水」。硬い氷だからこそのふわふわ感をこの夏、どこかで味わいたい。

(2015年12月22日取材)



右:天然の氷づくりを継承した四代目徳次郎さん
①前日に引いたラインに沿って氷を切り出していく
②切り出した氷は竹のレールで滑らせながら運ぶ。氷の重さは約40kg
③氷が運び込まれる前の水室。壁板、床板も地元の杉材。床板の下は砂利で水分を逃がす
④水室に運び込まれた氷。大鋸屑をかけることで1年以上保管できる
⑤ゴミをとるためだけに凍らせ、表層に張った水ごと捨てるので不純物が少なく透明感に優れている



制約を味方にする 小さなベンチャー

長崎県小値賀島（五島列島）

人口減少期の地域政策を研究し、自治体や観光協会などに提案している多摩大学教授の中庭光彦さんが「おもしろそうだ」と思う土地を巡る連載です。将来を見据えて、若手による「活きのいい活動」と「地域の魅力づくりの今」を切り取りながら、地域ブランディングの構造を解き明かしていきます。その土地ならではの魅力や思いがけない文化資産、そして思わぬ形で姿を現す現代の水文化・生活文化にご注目ください。今回は九州本土からおおよそ50kmほどの西の海上にある、かつてアジアの交通の要衝として栄えた「小値賀島^{おぢかじま}」です。

小値賀島の北部にある「長崎鼻」。ここでは牛の放牧地で、草を食(は)む牛の姿と青い海がすばらしい光景をつくる

隔絶は魅力なのか？

「大半の島には人をひきつけるような歴史もないし風景もない。それだけで島には魅力がある。隔絶せられた社会だからである。憩いの場として、海を利用したスポーツ、保養の場として利用するならば、利用の道は多いし、それなら島民もともに参加することができる」

1970年（昭和45）に書かれた

「離島の現状」の一節だ。書いたのは宮本常一。全国を見て・聞いて・歩いた民俗学者として有名だ。彼は1953年（昭和28）離島振興法成立に尽力し、同年設立された全国離島振興協議会の初代事務局長になった。時代は戦後復興から高度成長期へと移る。島から人口が流出し無人島が増えるなか、島の人々の生活を支援したいと考えた。

時を経た現在。島の文化を人々は



中庭 光彦 さん

なかにわ みつひこ

多摩大学経営情報学部事業構想学科教授
多摩大学研究開発機構総合研究所副所長

1962年東京都生まれ。中央大学大学院総合政策研究科博士課程退学。専門は地域政策・観光まちづくり。郊外や地方の開発政策史研究を続け、人口減少期における地域経営・サービス産業政策の提案を行なっている。並行して1998年よりミツカン水の文化センターの活動にかかわり、2014年よりアドバイザー。主な著書に『オーラルヒストリー・多摩ニュータウン』（中央大学出版部 2010）、『NPOの底力』（水曜社 2004）ほか。

5
魅力づくりの
教え

どのように捉え、生活しているのか？ 島に抱く私たちの離島イメージをそのままにしてよいのか？ そこで、今回は宮本も訪れた長崎県五島列島の小値賀島を訪ねてみた。

かつての小値賀のベンチャーたち

佐世保からフェリー「なるしお」で3時間20分。小値賀港に着く。長崎県小値賀町はこの小値賀島と周辺の島々からなる人口2602名（2016年5月6日）のまちだ。

港のある笛吹郷は島の中心街だ。島の歴史は古く、奈良時代には遣唐使の経田地だったし、江戸時代から明治時代にかけては捕鯨拠点でもあった。さらに五島列島の島々を結ぶ商人ネットワークの中心地でもあった。笛吹の曲がりくねった道と路地には歴史が刻まれている。

例えば中心部にある「歴史民俗資料館」。ここは島の旧家・小田家の屋敷をミュージアムにしたもので、平戸藩を治めていた松浦の殿様もここを訪れていた。松浦氏は捕鯨を保護したのだ。

小田家の初代・小田伝兵衛重憲は彦岐から小値賀に移り、捕鯨業を始

めた。二代目・小田伝次兵衛重利（1671年生まれ）は対馬や平戸まで出漁した。そこで得た膨大な富の一部を藩にも献上した。その後、海産物販路を開拓するばかりか自ら船をつくり、廻船業、酒造業、さらには新田・植林の開発も行なった。

小田家と同様にいわば島のベンチャーとして特筆されるのが尼崎家だ。初代の尼崎忠兵衛は1869年（明治2）笛吹郷生まれ。彼は海藻を燃やした灰がヨード、そして火薬や薬の原料となることに目をつけ、小値賀沃度製造所を創立。その後は1907年（明治40）に劇場布袋座を設立。魚市場、海運業、発電所建設、銀行、醤油・酒醸造、衣料品販売と、五島と長崎をまたぐ島々の総合商社となつていった。島の方に歴史を伺うと「あまぢゆう尼忠さん」という呼び名が何度も出てくる。

笛吹郷は要衝の島ならではのベンチャーの活躍が刻まれたまちなのだ。

活版文化で小値賀を世界に発信

その笛吹郷の小路に、島唯一の印刷所、晋弘舎活版印刷所がある。100年以上続いている印刷所の四代



歴史民俗資料館の前にある古い石畳の坂。捕鯨で栄えた小田家のかつての船着場跡だ





「活版のよさは、時間がかかること」と言う晋弘舎活版印刷所の四代目、横山桃子さん。活版印刷の昔のイラストは、円内の写真のように一つずつ手で彫った版を用いていた。下は笛吹郷にかつてあった劇場布袋座の宣伝チラシ



目として活動しているのが横山桃子さんだ。「活版印刷を通して小値賀を世界に発信していきたい」と言う。今は珍しくなった活字棚がずらりと並んだ工房は圧巻で、観光客にも公開している。

横山さんは笛吹郷生まれ。大学でデザインを学び、東京でも編集の仕事をした。現在は島に戻り、ホームページやSNSでも情報公開し、北海道から沖縄まで顧客を広げている。

活版は名刺によく使われていたが、紙に少し窪みができ独特の書体が並ぶ風合いが美しい。大量の文字の活版棚から文字を拾い、それを組んで版にして印刷する。PCで版をつくるのが現在の印刷業界の主流だが、活版の質感を求めて横山さんに注文

が集まるのだ。

「活版のよさは、すぐにはできないことです。時間がかかる。時間がかかることはデメリットとは思っていないので。島の人は船が欠航したらあきらめなくてはいけない。自然とよりそっているのです、自分ではどうしようもできない」

島に生きる自然の制約感覚と仕事の制約感がつながっている。

「パソコンはなんでもできる。でも活版にはいっぱい制限がある。組み方、文字の大きさも決まっている。制限があるなかで、どれだけおもしろいものができるかが活版のよさ」と言う横山さんのデザインは、小値賀島特産のピーナッツペーストのラベルや多くの印刷物に使われている。

制約をなくそうとするのではなく、制約を受け止め強みに変える創造力に、私は感じ入ってしまった。

先々代となる祖父は、活版印刷は文化と話していたという。

「続けることが大事だと思っています。100年続いているので、それに魅せられている人がいる。それを継がなくてはいけない。200年続けばさらに魅力的になる」と、歴史そのものが魅力の源と横山さんは話してくれた。

島の環境を活かして 健康的な子牛を育てる

小値賀島にはたくさん牛がいる。畜産業が盛んなのだ。一般に、畜産農家は繁殖農家と肥育農家に分かれる。

繁殖農家は母牛に子を産ませて1年未満で出荷する。その牛を全国の肥育農家が仕入れ、三重に行けば松阪牛になるし長崎に行けば長崎牛と、肥育された土地のブランド牛となる。小値賀は牧草に海水によるミネラル

が増えるため質がよいと、昔から繁殖農家による畜産が盛んなのだ。迎真志むかえまきしさんも繁殖農家の一人だ。

牛を育てるおもしろさは何か。

「牧草、畑、育て方、それぞれ異なるなかで育てた牛に値段がつく。それがうれしい」という。千葉や新潟の牧場からも買い付けに来るそうので、販路は広い。

「健康的な子牛がたくさんできればいい。島だから病気も入ってきにくい」と、健やかな牛にこだわって育てている。

畜産業も、島の環境を活かした会社と同じようなビジネスではないか？健康な牛を育てるのにこんな適した場はないと私には思えた。

親戚の家に来たような 民泊の雰囲気

さて、島の宿泊。われわれは濱元さん夫婦が営む「民泊おくぼと」にお世話になった。ホームステイという意味の「民泊」で小値賀島ではこの民泊受け入れ家庭が約30軒ある。

濱元さんご夫妻も畜産農家、そして息子さんとの三人暮らし。イナカの親戚に帰省した感じだ。

夜は濱元さん一家とお食事。新鮮な鰯刺いわしなどをいただき、話も盛り上がる。

「家って昔はこんな感じだったな」と思い出した。民泊は、家族のかかわりを思い起こさせてくれる場なのだ。お客さんのなかには「帰りたくない」と泣きじゃくった女子高生もいたそうだが、それもわかる気がした。

きめ細かなサービスを 提供するツーリズム協会

これまで登場した方々を紹介いただき、小値賀島でのアクティビティ提案、ガイド、これらをワンストップサービスで提供いただいたのがNPOおぢかアイランドツーリズム協会

会の皆さんだ。

理事長は尼崎豊さん。そう、尼忠さんのお孫さんだ。今、この協会は日本版DMO(注)の先駆けになるのではないかと注目されているのだが、尼崎さんは流行に流されることなく慎重に成り行きを見守っている。小値賀町では観光協会を1996年(平成8)に設立し、尼崎さんは事務局長となった。

2001年(平成13)には、1989年(平成元)から続いていた廃校を簡易宿泊所として使った「野崎島自然学塾村」が「ながさき島の自然学校」という全国に自然体験学校をつくる総務省プログラムに採用された。夏期に2週間、子どものキャンプを野崎島で行なうのだが、途中で小値賀島本島にいったん戻るようになっていた。ところが、その子どもたち全員を島の旅館だけでは収容できない。そこで民泊を導入したのがきっかけだった。当時、大分県の安心院あしんいんでも同様の取り組みを始めており、尼崎さんは研修に赴き「やれる」と思ったという。

2006年(平成18)には民泊の組織であるアイランドツーリズム推進協議会、観光協会、ながさき島の学校(野崎島自然学塾村)、この三つが合



牛を50頭ほど育てる迎真志さんは二児の父。諫早市の農業大学校で学び、帰島した



「民泊おくぼと」の濱元さんご一家。弥一郎さん、照美さんご夫婦は民泊がスタートした当初からの受け入れ家庭



廃校となった小値賀小中学校野崎分校は、簡易宿泊施設・休憩施設「野崎島自然学塾村」として利用され、夏には子ども向けのキャンプも行なう



東京を離れて小値賀島に移り住んだ木寺智美さん（左）と小値賀島生まれの畑村真美さん（右）

NPO おぢかアイランドツーリズム協会の尼崎豊理事長

併してNPO法人になり現在に至っている。民泊は目玉サービスに育っている。私たちは3日間在島したが、きめ細やかなサービスは小値賀島のようなコンパクトな規模だから可能なものなのだろう。

この協会には12名のスタッフがいます。木寺智美さんは神奈川県平塚生まれ。東京でシステムエンジニアをしていたが、エコツーリズムガイドの育成研修で小値賀に来たところ「ビビッときて」こちらに住むよう

になった。小値賀に来てから「自分が幸せだな、と感じることが増えました」と語る。

一方、地元生まれの畑村真美さんは、地元で仕事をしたかったという。「自分の地元を好きになってくれる人が増えるのはありがたいし、気づかせてくれるのもありがたい」と話す。

お二人だけではなく、お会いしたみんなから感じられる、島を信じる、おそらく理由などない心もちは、ど

のように生まれるのだろうか。

**制約を強みにして
稼ぐビジネスを**

われわれは野崎島にも渡った。2001年（平成13）に最後の住人が離村し、うち捨てられた集落を抜ける「野崎島自然学塾村」に着く。そこから5分ほど山を上すると「旧野首教会」だ。禁教令が撤廃（1873年）された後、潜伏キリシタンたちが信仰の証としてつくった教会で、建築したのは他にも長崎の多くのカソリック教会建築を手がけた鉄川与助。1908年（明治41）に完成した。

空間には意味があり、その歴史と出会うことで体験が生まれる。ほぼ無人の島の教会のなかに佇むと、私は3日間の体験について考え込んでしまった。

今回お会いした人々は、皆さん島のベンチャー、言い換えれば「仕事を創っている人々」だ。共通していた思考は「島であることの制約」に魅力を感じ強みにしていることだった。制約を打ち破るビジネスではなく、制約を受け入れ稼ぐビジネスを進化させている。



〈魅力づくりの教え〉

地域には必ず制約がある。制約を破壊するベンチャーもいれば、受け入れて進化させるベンチャーもいる。制約とどう付き合うかは、文化と魅力づくりの大きな論点だ。

（2016年3月22〜24日取材）

野崎島の高台にそびえる「旧野首教会」。建設費をつくるために、17世帯の信者たちが共同で暮らし、食事も一日二食に切りつめて建てたもの。廃村後は荒れてしまったものの、小値賀町が改修した

坂本クンと行く川巡り 第10回

Go! Go! 109水系

道の記憶と原風景を留める

「越後の荒川」

(山形県・新潟県)

坂本くんが選んだ川は「荒川」。といっても埼玉・東京を流れる荒川ではありません。山形県小国町の大朝日岳から新潟平野北部を横断して日本海に注ぐ、長さ73kmの荒川です。坂本くんは「荒川と名のつく川は全国に30近くあります。そのなかで

一級水系の本川が荒川という川は二つあるのですが、今回は山形県・新潟県を流れる荒川をご紹介します。ただし、これまで巡った川のなかでもっとも資料が少ないうえ、僕も河口付近を一度訪れただけなので、手探りの川めぐりになるはずです」と言います。

「清流荒川」とも呼ばれる越後の荒川は、どんな川なのでしょうか？

日本海に注ぐ 知られざる「荒川」

川系男子 坂本貴啓さんの案内で、編集部の方々も全国の「一級河川」「109水系」を巡り、川と人とのかわりを探りながら、川の個性を再発見していく連載です。なお、博士論文の執筆に奮闘中の坂本くんに代わって、今回の原稿は編集部がまとめました。

川名の由来【荒川】

水源から河口に達する距離が短く勾配も急なうえ、水源地帯が多雨・多雪地帯で、古くから洪水による災害が発生する暴れ川だった。「荒ぶる川」が転じて荒川になったと思われる。

109水系

1964年(昭和39)に制定された新河川法では、分水界や大河川の本流と支流で行政管轄を分けるのではなく、中小河川までまとめて治水と利水を統合した水系として一貫管理する方針が打ち出された。その内、「国土保全上又は国民経済上特に重要な水系で政令で指定したもの」(河川法第4条第1項)を一級水系と定め、全国で109の水系が指定されている。

【荒川流域の地図】

国土交通省国土数値情報「河川データ(平成19年)、流域界データ(昭和52年)、ダムデータ(平成17年)、鉄道データ(平成26年)」より編集部で作図

荒川

水系番号	: 33	
都道府県	: 山形県、新潟県	
源流	: 大朝日岳(1870m)	
河口	: 日本海	
本川流路延長	: 73km	70位 / 109
支川数	: 61河川	59位 / 109
流域面積	: 1150km ²	59位 / 109
流域耕地面積率	: 4.9%	89位 / 109
流域年平均降水量	: 2209.30mm	36位 / 109
基本高水流量	: 8000m ³ /s	39位 / 109
河口の基本高水流量	: 8598m ³ /s	47位 / 109
流域内人口	: 3万8160人	92位 / 109
流域人口密度	: 33人/km ²	98位 / 109

(基本高水流量観測地点: 花立(河口から8.0km地点))
河口換算の基本高水流量 = 流域面積×比流量(基本高水流量÷基準点の集水面積)
データ出典: 「河川便覧 2002」(国際建設技術協会発行の日本河川図の裏面)

坂本 貴啓 さん

さかもと たかあき

筑波大学大学院
システム情報工学研究科 博士後期課程
構造エネルギー工学専攻 在学中

1987年福岡県生まれの川系男子。北九州で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ちはじめ、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC(青少年博物学会)、大学時代にはJOC(Joint of College)を設立。白川直樹研究室「川と人」ゼミ所属。河川市民団体の活動が河川環境改善に対する潜在力をどの程度持っているかについて研究中。





上杉家と越後について語る米沢市上杉博物館の佐藤正三郎さん



胎内市教育委員会の水澤幸一さんの案内で訪れた「桃崎浜文化財収蔵庫」の船絵馬(右)。事前に申し込みれば、北前船の船主が絵馬師に自分の船を描かせて神社などに奉納した絵馬を見ることができる



米沢藩と日本海を つなぐ交通路として

坂本くと編集部は、まず山形県米沢市を訪れました。荒川は米沢藩と関係が深いようなのです。

米沢藩は、越後や佐渡などを治めていた上杉景勝が関ヶ原の戦いの時期に徳川家康に敵対したため、会津若松120万石からわずか30万石に減封され、1601年(慶長6)に成立します。米沢藩の交通路は、日本海に接した山形県庄内地方と内陸部を結ぶ最上川の舟運とともに、米沢から西へ向かい、小国町を過ぎて越後に至る旧米沢(越後)街道(以下、米沢街道)(注1)も使われていました。距離で見ると米沢街道の方が日本海に近かったのです。

江戸時代後期、荒川は河口に海老江湊、桃崎浜湊、塩谷湊の三港を擁し、特に海老江湊は荒川筋の天領領民からの願いで1797年(寛政9)に西回り廻船(北前船)の積み出し港となつて活況を呈しました。米沢街道は荒川の左岸を走り、海老江湊、桃崎浜湊まで通じていました。湊の痕跡はありませんが、河口部にある桃崎浜文化財収蔵庫には「船絵馬」86枚が所蔵されています。

米沢市上杉博物館の学芸員、佐藤正三郎さんによると、江戸時代の上杉家の当主は代々「わが家の出は越後である」という意識をもちつづけていたようです。

「越後は上杉家の旧領地なので思い入れはあったでしょうし、預かり地も今の新潟県村上市付近にありました。特産品の青苧(注2)は越後・小千谷縮の原料ですので、日本海との距離が近い米沢街道を利用したのは当然かもしれません」

新潟との県境にある小国町は米沢藩領。つまり荒川本流の手前までは自由に荷が運べたのです。ただし谷が深いため、越後へ抜けるには「十三峠」(注3)と呼ばれる難所を歩いて越えるしかありませんでした。

そこで、十三峠の保存や整備、情報発信に取り組むNPO法人ここ掘れ和ん話ん探検隊の事務所を訪ね、岡村俊春さんに荒川の支流・横川のそばを通る「黒沢峠」を案内していただきました。約500年前につくられたという十三峠。そのなかでも苔むした敷石が3600段続く黒沢峠は美しい街道といわれています。

『小国の交通』によると、米沢藩からは青苧、漆、蠟などの特産物を運び、越後方面からは生魚、塩、塩

(注1) 旧米沢(越後)街道

越後から米沢に向かう意味では「米沢街道」と呼ぶが、逆に米沢から越後に向かう場合は「越後街道」と呼ぶ。峠を中心に見た場合は「(越後米沢)十三峠」だが、これらはおおむね同じ経路を指す。

(注2) 青苧

木綿以前の衣服の主原料の一つ。小千谷や十日町などを中心に産する麻織物のうち、特に上等なものを「越後上布(じょうふ)」と呼び、青苧はその原料として重宝された。戦国武将の上杉謙信は青苧商人や港に出入りする船から税を取り立てて財政力を強めた。

(注3) 十三峠

1521年(大永元)に伊達氏十四代・穂宗(たねむね)が大里(おおり)峠を開いたことが始まりとされる。1878年(明治11)にはイギリスの女性旅行家で『日本奥地紀行』を著したイザベラ・バードも十三峠を通ったという。



黒沢峠の帰り道に通った横川は水量豊富で清らかな流れだった



苔むした敷石が続く黒沢峠



NPO 法人ここ掘れ
和ん話ん探検隊の
皆さん。右から加藤
喜一さん、栗田金男
さん、岡村俊春さん

米沢藩を支えた 豪農・渡邊家

翌朝、横川が本流・荒川と合流する小国町西端の赤芝峡で、坂本くん

魚などの海産物や小千谷縮や緋織、鉄などがもたらされていたのです。この道を、物資を牛に載せ、あるいは自ら背負って運んでいた先人を考えると、その労苦が偲ばれます。宿に向かう途中、横川が滔々と流れる夕暮れの風景に出合いました。雪解け水で満たされた水量豊かな様は、支流という気がしません。いつでも眺めていたい。そんな気分になりました。

はこう言いました。

「やつと荒川が見られました。すぐくいい川ですね！流量が豊富で、瀬と淵の連続がところどころに見られる。とてもきれいです」

赤芝峡を抜け、蛇行する荒川を見ているとすぐに新潟県関川村です。荒川の中流域にあたる関川村は、米沢街道の宿場町であり、かつ荒川の水運の船着場でもありました。

関川村教育委員会の安久昭男さんは「関川村には上関に番所がありました。また通行する船を検査して税の徴収などにあたる瀬番所もあったのですよ」と教えてくれました。『関川村史』によると、米と酒（注4）は川船で自由に運ぶことができたそ

うです。瀬番所の跡地とされている場所も案内していただきました。

この地で廻船業と酒造業、新田開発で財をなし、新潟でも指折りの大地主となったのが「渡邊家」（注5）です。最初の酒造の記録は1676年（延宝4）で、時代を追うごとに規模を拡大し利益を上げました。そこに目をつけたのが30万石から15万石へと石高が半減され、財政難に陥っていた米沢藩（注6）。渡邊家三代善久は1726年（享保11）、米沢藩に融資します。その後も代々にわたり特に第九代藩主・上杉治憲（鷹山）の藩政改革では多額な資金を提供し、その功によって苗字帯刀も許されます。渡邊家は幕末まで総額10万両以上を用立てたのです。

「渡邊家は米や酒を河口の桃崎浜湊まで船で下ろし、その荷は北前船で運ばれていきました。荒川は暴れ川なので川筋は変わりましたが、かつて渡邊家の邸宅付近は入江で、川船に荷を直接積みこんでいたそうです」と安久さん。渡邊家は、荒川をうまく使いながら米沢藩も支えたのです。

国の重要文化財に指定されている「渡邊邸」も見学しましたが、実に立派な佇まいでした。



荒川の赤芝峡。山が迫る狭窄部を避け、かつては十三峠で行き来していた

右は関川村教育委員会の安久昭男さん。下は、かつて荒川で使われていた川船と、渡邊邸の外観



（注4）米と酒

複雑な領有関係があったため、米と酒は「百姓産物」として船で運べたが、そのほかのものについては宿駅伝馬制度に基づき、いったん陸揚げしなければならなかった。

（注5）渡邊家

初代儀右工門（ぎえもん）善高は、村上藩の郡奉行を務めていたが、藩主国替えのときに家督を譲り、桂村（関川村桂）に隠居。1667年（寛文7）、現在地に移転。

（注6）15万石に半減

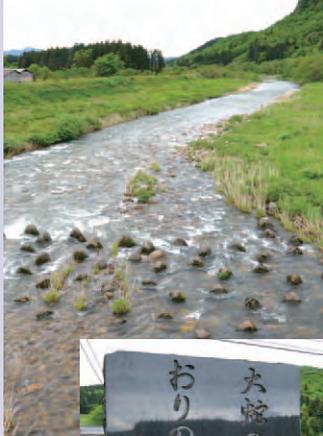
1664年（寛文4）に三代藩主綱勝が急死して養子を迎えたため石高が半分に。しかも家田は減らさなかったため、領内のみならず領外の豪商や豪農からも借財を重ねた。



「金屋たんぼ」観察中の坂本くん。右は国土交通省羽越河川国道事務所の河川調査係長、今井達也さん



甚大な被害をもたらした「羽越水害」(提供:村上市/「洪水魔荒川 8.28羽越水害の記録」)。左は国土交通省羽越河川国道事務所の調査課長、近藤栄一さん



大蛇伝説の舞台となった女川(上)と蛇になった妻「おりの」の碑。この碑は関川村蛇喰にある

大蛇伝説と頻発する水害

安久さんが「暴れ川」と形容したように、荒川は水害が頻発する川でした。関川村には支流・女川おんながわを舞台にした大蛇伝説(注7)があり、同じような伝承は上流域の山形県小国町にもあります。坂本くんはこう説明します。

「昔から蛇は『山の崩れ』を表す言葉としても使われてきました。大蛇が川を塞ぎ水害を起こすのは土砂崩れによる河道閉塞、いわゆる天然ダムの発生する危険性を表しています。大蛇伝説は危険の内在性を後世に伝えるものなのでしょう」

国土交通省北陸地方整備局羽越河川国道事務所を訪ねました。調査課長の近藤栄一さんは「流域の多くが脆弱な地質で、特に上流域は崩落・地すべりの多発地帯です。河床勾配は急で、雨も雪も多い。水害の記録は平安時代からあり、1757年(宝暦7)の大水害では復旧に50年かかったそうです」と話します。

そもそも荒川が一級河川に指定されたきっかけは、1967年(昭和42)年8月に発生した「羽越水害」。死者行方不明者90名、全壊・流出家屋

1056戸、被害金額約226億円(当時)という大水害でした。「右岸と左岸で18カ所、堤防がぎれました」と近藤さん。翌春から抜本的な河川改修が行なわれました。洪水調整などの目的で支流・大石川に大石ダムを1978年(昭和53)に、支流・横川に横川ダムを2008年(平成20)に建設。近年は洪水時に水を流れやすくするため土砂を取り除いていきます。これらの対策が功を奏し、現在まで大きな水害は起きていません。

来年は羽越水害50年の節目です。渡邊邸のあった関川村も、ここ村上市も、まちなかには羽越水害の浸水深を示す表示板が各所にあり、記憶をつなぐ大切さを感じました。

下流部の原風景は「たんぼ」と「礫河原」

羽越河川国道事務所の施策の一つの軸が、自然再生です。河川調査係長の今井達也さんは「たんぼ」と「礫河原れきがわら」が柱と言いました。「たんぼ」とは湧水のあるワンド

(注8)を指すこの地域独特の呼び方の湧水のある環境を好むトミヨ(注9)の生息に適しています。「ワンドを『たんぼ』と呼ぶのは初めて聞きました

(注7) 大蛇伝説

「ある夫婦が蛇喰(じゃばみ)という集落に住んでいた。夫が山で大蛇を殺して味噌漬けにしたのを妻が食べてしまい、蛇になって女川の上流に去る。数年後、妻は盲人の琵琶(びわ)法師に「荒川や女川一帯を湖にして住むつもりだ」と告げる。琵琶法師からそれを聞いた村人たちは蛇が嫌いな鉄釘を打ち込み大蛇を殺し、大水害を防いだ」というもの。

した。地域名がつくほどなじみ深い風景であり、大事にしてきたのでしよう」と坂本くんは言いました。

「昔、荒川はもつと蛇行していたうえ氾濫も多かったのでたんぼと礫河原は自然に形成されました。しかし羽越水害以降の河川環境の変化に伴い減少しつつあります」と今井さん。往時の川風景を保とうとするこの取り組みには、地域住民やNPOも多数連携。たんぼは8カ所で再生・改善され、さらに増やす計画です。失われつつある原風景を取り戻そうとする試みに、坂本くんは「河道が広がり流れ方が変わると、川の環境も変化します。それを敏感に察知した川づくりはすばらしいです」と驚いていました。

「清流荒川」の秘められた意味

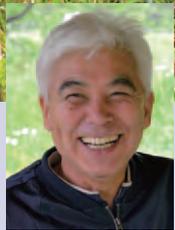
では、流域の人たちはどのように



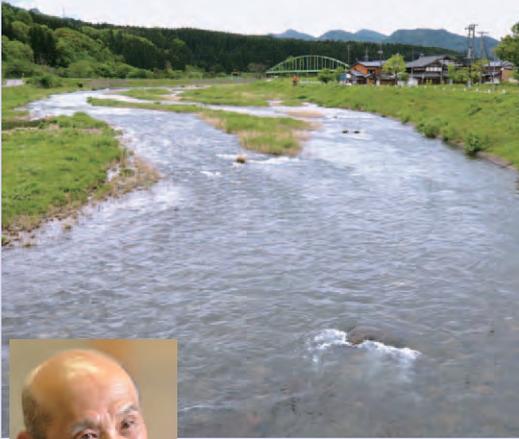
「金屋たんぼ」から遊歩道を通って荒川へ。水がきれいいて川底が透き通って見えた



「特色のある緑の公園を造る会」の会長、佐藤巧さん。上は子どもたちが植樹（育樹）している公園の緑地



「神林さくらの会」の副会長、鈴木昌平さん。上は植樹した桜並木が続く同会の活動拠点「神林水辺の楽校」



「大石・山と川に親しむ会」の事務局長、高橋正衛さん。上は支流・大石川の風景



荒川と接しているのでしょうか。坂本くんの大きなテーマである「川における住民活動」を探るべく、三つの団体に話を聞きました。

まずは支流・大石川で活動する「大石・山と川に親しむ会」。巨大なまくらで雪と親しむ「おおいし・どもんこ祭り」など交流事業を行なっています。きっかけは2004年（平成16）に国土交通省が策定した

「大石ダム水源地域ビジョン」のワーキンググループ。事務局長の高橋正衛さんは「観光客が年々少なくなりましたね。関川村の活性化のためにやる気になったのです」と話します。坂本くんは「水源地域ビジョンが地域に根付き10年以上も実践されつつけているのはすごいことだと思います」と感心した様子です。

続いて、羽越水害20周年を機に「水害を忘れず、未来に残る川にしよう」と右岸の堤防と河川敷で桜の植樹を始めた「神林さくらの会」。初代会長で今は副会長の鈴木昌平さんは「現代版の花咲じいさんだよ」と笑いますが、1988年（昭和63）に一本一万円のオーナー制度で始めたこの取り組みは今、1000本近くにまで広がりました。そして「特色のある緑の公園を造

る会」。1998年（平成10）からグリーンパークあらかわ総合運動公園で子どもたちの植樹（育樹）体験に取り組みます。114種・2300本あまりの苗を植えました。会長の佐藤巧さんは「小学校6年生までに里山で遊ぶと多くのことが学べます。子どもたちが足を踏み入れることで、森もまた健全になる。川の水をきれいにするには、いい森を育てることが大切です」と語りました。

また、同じく佐藤さんが代表を務める「清流」荒川を考える流域ワークショップ」は、流域で活動する市民団体の連携組織です。たんぼの保全にかかわるほか、春にクリーン作戦を、夏に「荒川と里山と田畑のめぐみ体験」（注10）といった流域を一体化する事業を行なっています。

出羽と越後の交通路だった荒川は、長らくこの地域の文化や経済を支える社会的な基盤でした。坂本くんは、羽越水害が転機になったと言います。「羽越水害を機に一級河川に昇格した荒川は、川幅を広げ堤防を築き水害が減りました。住民の方々は安堵するだけでなく、見慣れた豊かな川の環境も保つていこうと特色のある川づくりを行なっています」それが表れているのが、連携組織

名にも用いられる「清流荒川」という名称です。坂本くんは語りました。「荒川の本流には、発電用の小さなダムはあるものの、大きな河川横断構造物がないので水が不自然に減らず、水量が保たれるので多少の汚れなら希釈できます。またはっきりとした瀬と淵が連続して現われている。瀬や淵を通った水は空気を多く取り込むので、有機物を吸収・分解する微生物が活発化し水を浄化する作用がある。だから荒川の水はきれいです。さらに地理や文化、産業を反映した川づくりをしている人たちがいる。『清流荒川』という言葉には、水のきれいだだけでなく、住民の荒川に対する愛情を表す特別な意味もあると感じました。荒川の澄んだ川の水は、地域を映す鏡です」。

（2016年5月9日取材）

（注8）ワンド

本川内で池や入り江状となっている地形のこと。魚の休息場や産卵場、洪水時の避難場所になる。川の多様性を構成する大事な要素の一つ。

（注9）トミヨ

トゲウオ目トゲウオ科トミヨ属に属する淡水魚の総称。湧水など水温が安定した環境が必要。新潟県レッドデータブック絶滅危惧種I類。

（注10）荒川と里山と田畑のめぐみ体験

小中学生を対象に、一日かけて実施。荒川の水質・生物調査、農業や農業用水の学び、ネギの収穫体験などを通じて、荒川流域の恵みを体験する。

参考文献

- 「人づくり風土記（山形版、新潟版）」（農文協）
- 「藩史大事典 第一巻 北海道・東北編」（雄山閣）
- 「小国の交通」（小国町誌編集委員会 編）
- 「関川村史」「越後せきかわ大蛇伝説」（ともに関川村）

小国盆地の夕暮れ。荒川と十三峠を歩き来っていた先人たちも、同じような風景を見ていたのだろう



第24回里川文化塾

山を貫くトンネル用水路「二五穴」 参加者募集中!

にごあな

ミツカン水の文化センターでは、「使いながら守る水循環」を学ぶための「里川文化塾」を年に数回開いております。第24回目となる今回は、房総丘陵の小櫃川周辺に今も残るトンネル状の用水路「二五穴」に着目しました。「二五穴」は江戸時代後期から明治時代初期にかけてつくられたので、100年以上使いつづけてられています。その名の由来は、幅二尺×高さ五尺（およそ60cm×150cm）の大きさ。長いトンネルは200～700mあり、これをつないで用水路を形づくっています。

房総の住民たちの知恵と工夫の結晶ともいえる「二五穴」を再発見した国立歴史民俗博物館 研究部 教授の西谷 大さんと千葉県立中央博物館 主任 上席研究員の島立理子さんを講師に迎え、先人の苦勞と工夫を学び、そして往時の里山のあり方についても考えたいと思います。

なお、里川文化塾は第25回以降も企画中です。今後はホームページやメールマガジン「里川だより」でお知らせしますので、ぜひご参加ください!

日時：2016年7月31日（日）9:00～17:00 ごろ
（小雨決行。荒天時の順延日＝8月3日（水））

フィールド：千葉県君津市・小櫃川周辺

座学会場：君津市立久留里城址資料館（千葉県君津市久留里字内山）

集合・解散場所：[集合] 9:00 JR 総武線「津田沼駅」南口
→貸切バスで君津市立久留里城址資料館へ移動
[解散] 17:00 ごろ JR 総武線「津田沼駅」南口
（交通状況により遅延の可能性あり）

当日の予定：午前中＝講師2名による座学
午後＝大戸用水・平山用水の現地視察
※上記は予定です。変更する場合もございますので、
詳しくはホームページをご覧ください

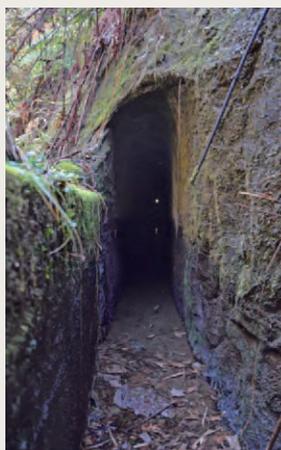
講師：西谷 大さん
国立歴史民俗博物館 研究部 教授・メタ資料科学研究センター長
島立理子 さん
千葉県立中央博物館 主任上席研究員

2016年7月31日（日）開催決定!
（千葉県君津市・小櫃川周辺）

※小雨決行。荒天時の順延日は8月3日（水）



「平山用水」の出口となる二五穴。田植えに備えて水を通し、稲刈りが始まる前のお盆過ぎに水を止める



水のない二五穴。秋から冬にかけてはこのような状態となる



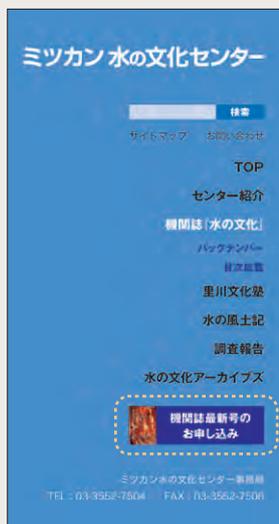
久留里城（くるりじょう）の復興天守閣から丘陵地帯を眺める



座学会場となる君津市立久留里城址資料館

ホームページに新しく2つのボタンが加わりました!

★機関誌の「試し読み申し込みボタン」を設置



まだ知らない人に機関誌の最新号を

年3回発行している機関誌『水の文化』。取材などで初めてお会いする方々に「こういう雑誌を出しているのですね!」と言われることもあります。そこで「多くの人に読んでいただきたい」と思い、ホームページ上に機関誌の「試し読み申し込みボタン」を加えました。クリックすると連絡先フォームに飛び、氏名やご住所などを入力していただくと、最新号が1冊お手元に届きます。

読者の皆さまの周囲で機関誌を知らない方には、ぜひ「試し読み申し込みボタン」の件をお伝えください。

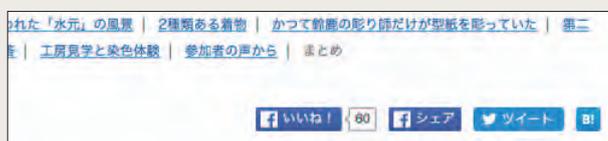
メニューボタンの下に設置した機関誌『水の文化』の「試し読み申し込みボタン」

★「ソーシャルボタン」が全ページに

「この記事、いいな」と思ったらポチッ!

ホームページでは機関誌（Web版、PDF版）をはじめ、里川文化塾、水の風土記、調査報告など水にまつわる情報を発信していますが、皆さまがどんな情報に共鳴しているのか、どのような記事に関心が高いのかはなかなかわかりません。

少しでも皆さまの反応を知りたいと思い、ソーシャルボタンを設けました。ホームページをご覧になって、「こういう情報は知らせたいな」「この記事おもしろかった!」と思った場合は、ぜひ「ポチッ」と押してみてください。



新設したソーシャルボタン。左から「Facebook いいね」「Facebook シェア」「Twitter」「はてなブックマーク」

水の文化 Information

■「水の文化」に関する情報をお寄せください

本誌「水の文化」では、今後も引き続き「人と水のかかわり」に焦点をあてた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根ざした調査や研究がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

■ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください。

<http://www.mizu.gr.jp/>

■水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページからPDFファイルとしてダウンロードできるほか、冊子をご希望の方はホームページの「最新号のお申し込みボタン」からお申し込みいただけます。どうぞご利用ください。

■里川文化塾レポート詳細版は、ホームページで

里川文化塾のレポート詳細版は、参加できなかった方も楽しめる内容です。今後の企画についても、順次ホームページでご案内します。ご注意ください。

メールマガジン配信中！

「里川だより」

ミツカン水の文化センターは、時期やテーマに沿ったさまざまな「水の文化」にかかわる情報を盛り込んだメールマガジン「里川だより」を配信しています。

「里川だより」では、機関誌の発行や里川文化塾の募集告知など、センターからの情報をいち早くお届け。1人でも多くの人にご覧いただきたいと考えております。

メールマガジンの配信をご希望の方は、タイトルに「水の文化センターメールマガ配信希望」と記載して「tokyo-office@mizu.gr.jp」までメールをお送りください。

ご連絡をお待ちしております！

編集後記

当センターの活動で水辺や川を訪れることも多い。水辺にはかわいい河童の看板や像をよく見かける。私の子供の頃、河童は怖いものだった。いつからイメージが変わったのだろうか？取材を通じて人間が水をコントロールできるようなって来たことが変容の背景にあることが理解できた。しかし、今でも水難事故は絶えない。河童はかわいくてもいいが、自然はコントロールできない。過信することなく水に接していきたい。(後)

小松先生の取材の日の夜、5歳の息子に先生から何った話をした。すると「僕びびっちゃった。」と、見えない妖怪を気にして、普段にない早さでお利口に寝入った。育児や生活に妖怪の力は絶大で、知らぬ間に古来からの智慧を自分も引き継いでいるのを実感した。(松)

アニメや絵本の中のものだった妖怪が日本人の生活に根ざした文化なのだとよくわかった。子どもの頃に好きだった民話などを紐解く機会があったら、「怖い」「面白い」「可愛い」だけでない妖怪の裏側を探り、挿絵以上に恐ろしいその背景にも迫ってみたい。(原)

人間には様々な人がおり、妖怪には色々な種類がある。人間界の私は、妖怪という世界が実在し、妖怪自身は普通に生活をしているのかもしれないと感じた。自分の世界が当たり前ではなく、他者の世界も当たり前。違うことを受け入れることの大切さを再認識した号であった。(吉)

お化け屋敷は嫌いだ。つくりものとわかっていても、子どもの頃から刷り込まれた不気味さや、普通の人間では太刀打ちできない恐ろしさの印象が強いからだ。でも、相撲で勝つことができる河童には話しかけてみたいと思う。(力)

妖怪が日本人にとってこれほど重要な存在だったとは……。「河童も水辺にいるし、妖怪がいんじゃないかな？」と少し軽く考えて企画したことが今となっては恥ずかしいです。話は変わりますが、今号から印刷用紙を替え、背表紙に特集名と号数を記載します。「どの号だっけ？」と悩まずに、スッと手が伸びるようになればうれしいです。(前)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化 第53号

ホームページアドレス

<http://www.mizu.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中塾ビル 4F
株式会社 Mizkan Partners
Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

お問い合わせ

ミツカン水の文化センター 事務局

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町 1-11-3 中銀 NM・5F
Tel. 03 (6264) 9471 Fax. 03 (6685) 7596

発行日

2016年(平成28)6月

企画協力 (氏名50音順)

沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信 法政大学教授
鳥越皓之 大手前大学学長
中庭光彦 多摩大学教授

制作

後藤喜晃
松本裕佳
小林夕夏
原田朱野
吉田奈保子

編集製作

前川太一郎 編集
中野公力 デザイン・撮影

執筆

佐々木 聖 (pp.6-9, pp.24-25)
手塚ひとみ (pp.13-15, pp.31-34)
開 洋美 (pp.10-12, pp.20-23, pp.26-30)
前川太一郎 (pp.16-19, pp.38-39)

撮影

大平正美 (p.13)
川本聖哉 (pp.2-3, pp.20-23)
鈴木拓也 (pp.16-19)
中野公力 (p.11, p.25, pp.45-49)
藤牧徹也 (p.6, pp.26-34, pp.38-44)

描画

わたなべじゅんじ (pp.5-36)

印刷

中塾総合印刷株式会社



ミツカン水の文化センター

表紙：障子に穴を開けて、こちら側（人間界）を覗き込む妖怪たち（撮影協力：百妖箱「妖怪アートフリマモノケ市」／撮影：川本聖哉／河童描画：わたなべじゅんじ）

裏表紙上：滝と淵が連なる徳島県三好市山城町の「どろめき淵」。河童のような姿をした「エンコ」が潜み、苔の生えた滑りやすい岩場に近づく人間や家畜を狙う。どろめきとは轟く（どろめく）に由来する（撮影：鈴木拓也）

裏表紙下：（右）鳥山石燕『今昔百鬼拾遺』から「蟹気楼」。昔の人たちは蟹気楼を「大きなハマグリが気を吐き出すために起きる」と考えていたという（国立国会図書館蔵）

（左）桃山人筆・竹原春泉画『絵本百物語』から「船幽霊」。「盆（や大晦日）は海に出るものではない」とされるのは船幽霊が現れると思っていたから（川崎市市民ミュージアム蔵）

